都立高校独立国 上
作/首藤剛志 絵/古山匠

都立高校独立国 上

東京都渋谷区松濤(しょうとう)町の都立松濤高校は、超高級住宅地にあること以外は特徴のない高校だ。ところが、奇蹟ともいえる天才投手の出現で、夏の甲子園東東京の代表校になってしまう。

一躍、有名になった松濤高。しかし決勝戦で破った相手の、野球校の罠にはまって、甲子園出場辞退に追い込まれてしまう。真相を知った生徒たちは学校側や高野連に訴えるが、事なかれ主義を決め込む彼ら大人たちは聞く耳を持たなかった。

やり場のない怒りに襲われる生徒たち。だが彼らはあきらめのなかから、大人たち＝体制に対して、ある大胆な計画を立てたのだった……。

都立高校独立国

首藤剛志

松濤のおばあちゃんが、びっくりした話

都立松濤高校独立国　初代大統領の私信より

＝門外不出＝

拝啓

突然の手紙で、驚いたかもしれません。

驚いてもらっても、今回は、ちっともかまいません。

なにしろ松濤(しょうとう)のおばあちゃんが、僕に、本当にいたとして、その松濤のおばあちゃんがこの話を聞いたら、きっとびっくりするに違いない、ちょっとした事件なのです。

僕のことをもう忘れたかもしれませんが、松濤のおばあちゃんといえば、思い出してくれるかもしれないと思って、こんなことを書いています。

去年の夏、マハラジャという古くさい店で出会った高校生が僕なんです。

たまたま、浦和に住む僕のおじさんがBMWを買ったので（もちろんローンだけど)、それほどBMWに乗っていると女の子にもてるのかどうか試したいと、嫌がる僕を案内役にして六本木に繰り出したんだけど、いくら僕が東京の渋谷に住んでいるからって、普通の高校生です。

そんなに年中、チャラチャラ、六本木なんかで遊んでいるはずないですから、仕方なくポパイとホットドッグを、渋谷の紀伊國屋で立ち読みして（あそこは、ビルの五階にあるのと、雑誌がほかの店のように店頭に並んでいないので、目立たなくていいのです)、で、もって、最近、流行の店というのを二、三リストアップして、六本木に行ったのですが、ポパイやホットドッグに載るころはもう流行遅れて、ましな女の子はひとりもいず（これは僕のおじさんの台詞(せりふ)です)、結局、マハラジャなんていう、紀元前

に有名だったらしい店にいったんですよね。
そのとき、君たちのグループを見つけたんだけど、僕が、渋谷の松濤町に住んでいると言ったら、急にケラケラ笑いだしたのが君の友達でしたね。
そのとき、君の友達は言っていましたね。
「確かに、今どき成城や田園調布はイモよ。けど、松濤に住んでいるなんて、いくら何でもしらふで言わないでよ。せめてさ、松濤に親戚がいるとかさ、おばあちゃんが住んでいるぐらいの嘘なら、のってあげてもいいんだけど、自分が住んでいるなんて、いい加減にしなさいよ」
で、もって、僕のおじさんの持っている車がBMWだと言ったら、六本木のカローラねと言われちゃうし、アウディはドイツじゃパトカーだわ、ベンツはタクシーで、
「じゃ、俺は何に乗ればいいんだい」
と聞いたおじさんに、君はポツリと言いましたよね。
「VWの昔のビートル」
おじさんはこけて見せていたけど、僕はシトロエンの次にビートルが好きなので、というのも、小学一年のとき、初めて作ったプラモがVWのビートルだったんですね。
それで、何となく、君のことが、印象に残っていたんですよね。
もっとも東京じゃ、BMWを六本木のカローラとか、松濤のおばあちゃんをネタに口説くのはローマ帝国の滅亡か、平城京の遷都ぐらい古いトークらしいんですけど、いずれにしろ、僕が松濤町に住んでいることは確かで、おばあちゃんがいないことも確かで……
でも、君たちは、僕たちを軽く振ってくれて、それでも帰り際に、学校の住所だけは教えてくれましたよね。

確か、留学先のドイツのシュツットガルトの大学の住所でしたよね。
ええ、後でベンツの工場のある町だということは、知りました。
それでもって、君が帰り際に言った言葉を、僕は、忘れていません。
「松濤のおばあちゃんはもう結構。そうね、どこかの国の大統領にでもなったらおつきあいしてもいいわ」
君はそれで僕を振ったつもりでも、僕は、君を忘れられません。
君と、お付き合いしたいと思っています。
なぜなら、僕は、今、大統領なのですから……
君の言った資格だけはあるのですから……
今度、日本に戻ってきたら、成田空港から、0000－467－0001にＴＥＬしていただけませんか？
都立松濤高校独立国の大統領部屋に通じる直通電話です。
電話代は、こちら持ちです。ご安心ください。
いわゆる、パーソン・トウ・パーソン・コレクトコールです。
では、吉報をお待ちしています。
大統領としてではなく、松濤高校三年九組の男子生徒の一人として、待っています。

Hiroshi Yamamoto
都立松濤高校独立国大統領
山本　浩

目次

国立代々木競技場
NHK
イエロー通り
ビデオレンタルTop10
公会堂
税務署
渋谷区役所
法務局
東武ホテル
コスミックスロープ
オルガン坂
パルコ2
パルコ3
パルコ1
プチ公園通り
消防署
12ヶ月
電力館
ファイヤー通り
渋谷ビデオスタジオ
東急ハンズ
渋谷温泉
ペンギン通り
映画館
元ホテル
ジャンジャン
教会
公園通り
スペイン坂
SEED
十コージコーナー
丸井本店
150円コーヒードトール
カメラのドイ
映画
LOFT
西武B
丸井
大盛堂書店
井の頭通り
センター街（ハンバーグストリート）
ONE OH NINE
西武A
映画
109 PART2
明治通り
東急文化村
東急本店
パチンコ屋
東急本店通り
勧銀
三千里薬局
ザ・プライム
109
ラブホテル街
道玄坂
五月女
映画館
パチンコ屋
ハチ公
渋谷駅
井の頭
女子高バス
東映映画
東急文化会館
代々木公園
明治神宮
新宿
オリンピック通路
原宿
宮ヶ谷一丁目
神南二丁目
国立代々木競技場
山手通り
NTT
代々木電話局
神山町
NHK
JR山手線
都立松濤高校
松濤2丁目
松濤一丁目
松濤公園
松濤美術館
都民会館
宇田川町
公園通り
神南一丁目
オルガン坂
井の頭通り
明治通り
円山町
道玄坂二丁目
神泉
神泉町
道玄坂
井の頭
道玄坂一丁目
渋谷
青山
玉川通り
六本木
東横
首都高速3号

序章

ミラクル松濤(しょうとう)

「うそだろう?」
目の前で起こっているのは奇跡だった。
都立、松濤高校（通称、松高）の生徒会副会長、山本浩にとってみれば、本当に目がくるくるまわるミラクルだった。
浩は、ダッグアウトの中でミネラルウォーター、ペリエをぐいっと飲みほした。
すでに浩はポカリスエットの一リットルボトルを二本、汗にして蒸発させている。
なにしろ暑い。
ともかく暑い七月末の神宮球場だ。
おまけに試合は、一対〇の接戦——。
しかも九回裏——。
あと、スリーアウトで勝利が決まる。
まさに白熱である。
グラウンドも観客席も湯気が立っている。

最近、松高では、蚊取り線香以外には聞いたことのないキンチョーという単語が、煙どころか、炎をあげて燃えている。
なんてったって、この試合はまだ夏だというのにすでにBクラスの決まったヤクルト―巨人戦の最下位争いとは違うのだ。
いいいいいいいいいいい
なんてったってかんてったったって、全国高校野球予選、東東京大会の決勝戦なのだ。
この試合に勝ったほうが夏の甲子園に出場できるのだ。
決勝に進出したのは、本大四高。
これは常連のマンネリ出場校だ。
だがその対戦相手は、修得学園でも、早業でも二杉学舎でも、本体大附属荏原でも、今年の本命といわれた同じ本大の十高でもなかった。
本大四高対都立松濤高校――。
誰一人、予想できなかった決勝戦だった。
そして、一対〇で勝っているのは松高なのである。
キリストとシャカとマホメットが三人がかりでも不可能に思える奇跡だった。
しかもその一点が、神がかりを通りすぎている。
初回、本大四高のエース藤石良次が、ここ数日の連投の疲れからか先頭打者に四球を出した。
あとは、ノーヒット・ノーランだったのだから、結果的にはこの試合、唯一の四球だった。
次の打者は、無謀にも、今大会松高が二十回挑戦して十九回失敗した送りバントを決行――、

なんとダブルプレーを焦ったピッチャー藤石が、お手玉……。
どこにも投げられず、ノーアウト、一塁・二塁——。
だが、藤石の実力から見れば、相手が松高だけに、まだまだピンチとはいえないはずだった。
三番打者は、当然、バントする。
松高二十一回目のバントは……、これは成功したと呼んでいいのか悪いのか——。
アウトカウントを間違えたのか、ボールをとったサードがベースを踏めばホースアウトなのに、セカンドへ送球。セカンドはファーストに転送してのダブルプレー。
しかし、サードにランナーを残してしまった。
そして、今大会、二十四打数無安打の四番打者、土屋昇がバッターボックスに立つ。
ピッチャー藤石は、何をびびったのか、高校生がめったに投げないフォークボールを第一球目に使った。
投げられ慣れないフォークに、ボールはごめんなさいとおじぎをして、打者の一メートルも前にひれ伏し、バウンド……、キャッチャーの股間を抜けて、バックネットへ転々……。
早い話がワイルドピッチ——。
ランナー生還——要するにノーヒットの一点だった。
そしてその後の松高は、ご焼香のようにしめりっぱなしの雰囲気で九回裏までノーヒット。
だが、一点は一点で、相手がゼロなら勝てるのだ。
なにしろ、なんと……本大四高は、八回裏まで二十四の三振……一人のランナーも、いや、

一本の打球も、前に飛んでいなかったのだ。
ファールチップが五本と、キャッチャーファールフライが三本……。
三本ともキャッチャーは取れなかったから、アウトにはならない。
すなわち、二十四のアウトが二十四の三振だ。
あと三つの三振で、完璧完全試合——こんな言葉があるのかどうか知らないが——ともかく内野にも外野にも一度も守備の機会がなかったのだ。
ドスン！　キャッチャーミットに、ボールの重そうな音が響く。
「ストライク、バッター、アウト！」
アンパイアの高くあげた右手も、あまりのなりゆきにぶるぶる震えている。
これで、二十五奪三振。
……あと二つ……
松高のピッチャー速見健は、こともなげにVサインだ。
そしてダッグアウトの中——浩の隣で手に汗握っている関裕子にウインクした。
浩は横目で裕子を見て、ポッと溜め息をついてしまう。
関裕子、松高生徒会会長兼野球部部長代理兼チアコンパニオンという名の応援団のキャプテンである……。ついでにいうなら浩の小学時代からの幼なじみだ。
「やりそうよね——。わたし、カンドーッ……」
裕子はくちびるがかわくのか、さかんにリップクリームをつけながら呟いた。

……はい、はい。カンドーでも、カンサイの甲子園でも行ってください……
なにしろ、裕子がいなければここまで来なかったのだ。
奇跡の仕掛け人は、確かに裕子なのだ。
浩はがなり続けているラジカセに耳をやる。
「あと二人、あと二人！」
ラジカセから、ＮＨＫ第二放送で中継中のアナウンサーのつばが飛んでくるようだ。
「都立松濤高校ナインの顔は心なしか青ざめています」
……ナインかあ……確かに九人いるよなあ……
一番　陸上部　大沼亮二
二番　サッカー部　大塚信一
三番　キャッチャー　南敏夫
四番　ライト　土屋昇
五番　サード　小松誠一
六番　ファースト　秋田晋
七番　バレー部　三河和博
八番　茶道同好会　千家元麿
そして九番　無所属　速見健
なぜ、一・二・七・八・九番が野球以外かというと、本来、松高野球部には四人しか部員が

いないのだ。
だからシーズンになると、試合のときにかぎって、生徒会が駆けずりまわって他の部からレンタルしてくる。
レンタル料はチアコンパニオンの面々とのサマーコンパニオン回数券三枚だから安いものだ。
もちろん、今どきデイトフィーをワリカンにできる度胸のある男の子はいない。
女の子にしたら、ふところは痛まず、カボチャとイモを横目で見るのを三日間我慢すればいいのだから、楽なものである。
それに男の子たちも、けっして損はないはずだと裕子は思っている。
なにしろ、チアコンパニオンのメンバーは、男子生徒の間で行われる闇のミス松濤コンテストのベストテンがずらりとそろっているのだ。
ピンはディズニーランドから六本木のディスコ、キリはホテルインペリアルのスカイラウンジぐらいの出費は我慢しなければならない。
……でもって、ポン引きは僕だものなあ……豊島園にもいったことがないのになあ……
裕子が会長の生徒会の方針は、対外行事には必ず参加することだった。
だから野球も出場……。
そこで、それにからむ雑用は、ほとんど副会長の浩の仕事になる。
野球部の九人を確保するため、男子生徒に交渉するのは浩だった。
……だんな、いい女の子いまっせ……

今や、渋谷はおろか、新宿の歌舞伎町でもめったに見ないポン引き商売を練習しているようなものだ。

それでも、今年はメンバーの集まりが悪く、準々決勝までは、浩がナインの一人だったのだ。

チームの実力は、ナインの一人に茶筅（ちゃせん）より重いものを持ったことのないという茶道部の千家元麿が入っていることでうなずける。

どうしてこんな野球部なのかというと、それについてはちょっと松濤高校と松濤という町について語らねばならないだろう。

＊

東京都、渋谷区松濤町——。

まるで、サイのようなつのをはやした恐竜、トリケラトプスの頭の化石のような形をした渋谷区の北西側の大地にある都内屈指の高級住宅地が松濤である。

松濤という町は、昔、佐賀の鍋島氏が狭山茶を栽培するために造った松濤園という茶園に由来する。

松濤とは、茶の湯のたぎる音から出た名で、園内にあった湧（わ）き水の池が今は松濤公園として面影を残していると、ガイドブックに書かれているが、この手のガイドの説明のパターンで、観光客が期待に胸をふくらまして行くとがっかりするような小さい公園だ。

さりげなく歩いていて……、あら、こんなところに公園が……、というのが似合っている風

情である。
明治以降、鍋島氏はこのあたりの土地を買い手を選んで売ったため、今も固定資産税だけでビルが建ちそうな超高級住宅……いや超高級邸宅が並んでいる。
この地区の松濤幼稚園では、ロールスロイスやベンツ、若奥さまが運転するポルシェやジャガーで、数百メートル離れた邸から送り迎えされ、全員誘拐したら身の代金の総額が国家予算を超えると噂される幼児たちがエアロビクスしているかわいいご様子が拝見できるという。
しかし、その松濤町のすぐ隣は、円山、花町、母の町のラブホテル街。
さらに宇田川町、神南、道玄坂の大繁華街。
ほかの都心部の地域と同じように、大企業の再開発の最重要地点として地上げが横行、地価は天文学の領域に踏み込んでしまった。
とくに駅前から松濤、そして神南にあるNHKにかけての地区は、東急と西武という二大ライバル私鉄会社の対決の場となり、地元の商店街があれよあれよという間にビル街になり、それもヤングを対象にしたファッションビルが建ち並び、みるみる風景を変身させてしまった。
変身したのは風景だけではない。
名も知れぬ通りが、いつの間にか公園通り、ファイアー通り、地中海通り、イエローストリート、プチ公園通り、ペンギン通り、SING通り、コスミックロープ……、そしてスペイン坂にオルガン坂となり――。
松濤のおばあちゃんがこの地名を聞いたら、渋谷の街に外出するときは、きっと海外旅券を

持っていくことだろう。

そんな地名とファッションに引かれ、ぞろぞろとレミングの行列のような人の波が、ビルの谷間にあふれている。

そして、そんな周囲の街からあまりに違った静かなたたずまいの屋敷町、松濤の存在——ミスマッチというかレトロというか……。

それがまた人気を呼ぶ。

松濤は若い二人の格好のデイトコースとして、アウトドアだのニュートラだのトラッドだの不思議な横文字を使うポパイやホットドッグやアンアンやノンノ的人種がうろつきだし、なにやら騒然としてきた今日このごろだった。

さて、そんな屋敷町のど真ん中に、地上げ屋がよだれをたらしたら軽く六十リットルのポリバケツが必要になるような空地があった。

空地……？　いや、空地に見えて、実は高校の校庭なのである。

だが、放課後に練習をしているクラブの人影をほとんど見ないから、空地といわれても仕方ないのかもしれない。

これが東京都立松濤高校であり、ペンペン草のはえている校庭が、いまの松高の姿をそのまま表している。

公立とはいえ、東京における都立は他県の県立ほどスーパーな存在ではなくなっていた。

かつては東大合格者の数で上位を競いあっていた都立の栄光はいまはなく、私立の受験校に押されて、現役で国立大学に合格できる者は皆無となり、いつのまにか三流高校の名をほしいままにしている高校が多い。

で、その典型ともいえるのが松高だった。

なぜ松高に入学したのかを聞けばすぐに分かる。

その一　有名私立高校に落ちたから――。

その二　公立だから授業料が安い――。

その三　家の近所にあるから――。

これが、松高生の入学の理由のベストスリーだ。

勉強は駄目、かといって運動も興味がない。

ただもう渋谷の一等地にだだっ広い校庭を持っていることだけが取り柄のような学校だった。

したがって、無気力を絵にすれば松高になるというほど、やる気のない人間が集まっていた。

とくに男子生徒はノンパワーが代名詞だ。部活動は全校生徒の五十分の一しかやっておらず、生徒会の委員にも男子はほとんどいない。

ここ十年間、生徒会の会長や役員はいつも女性だった。

「でもって、僕が副会長だもんな……やれんわい……」

浩は溜め息をつくしかない。

いくら男子生徒が無気力でも、生徒会に男子がいないのでは対外的に格好が悪い。

そこで、三年のクラスの最後、三年九組のしかも出席番号が一番後ろの山本浩が、副会長に選ばれてしまったのだ。
断ることもできたのだが、幼なじみであり、生徒会会長の裕子に、
「浩ちゃん、やってくれるわよね」
と頼まれると、なんとなく頷いてしまっていた。
……なあに、生徒の活動がほとんどゼロの松高だ。生徒会の仕事だって楽なもんさ……
と思っていたのが大間違い。
裕子は例年の女子会長以上にがんばりだしたのだ。とくに最悪最弱のクラブ、野球部に肩入れを始めた。
あげくの果てがこの決勝進出だ。

＊

「ストライク！」
審判のコールに、浩はドキリ！
あと五つのストライクで、勝ちが決まってしまう。
もしも甲子園に出場することになったら、ひまなつもりの夏休み、一挙に生徒会の雑用がふえるだろう。
いちおう浩だって来年は受験なのだ。

気休め程度は勉強をしておいたほうが、浪人したときの親への言い訳にはなる。
「いっしょけんめい勉強したのに、ああ……」
などと涙ぐみ、一週間ほどしょげていれば、周囲の同情をひき、気がねなく浪人もできるというものだ。だが、甲子園に夢中になって、勉強がおろそかになって不合格では、親に言い訳のしようもない……。
……困ったもんだ……
といっても、これだけ盛り上がっているのだ。甲子園に行くな……、この試合、負けてほしいとは、とてもいえない。
……ああ……。どうしてこんなことになっちまったんだ。東東京地区には百三十を超える高校がある。なにもそのうちの一番にならなくてもいいじゃないか……
だいいち、高校の数の多い東東京だ。トーナメント制の決勝まで、チームによってはわずか二週間ほどの間に、八試合もやらなければならないところもある。
八試合を勝ち進むのは、並の高校ではとうてい無理にできている大会なのだ。
ところが、今年は無理が通ってしまった。
そりゃ、最初の二試合ぐらいまでは、運がよければ勝てることもある。
なにしろ条件が同じ都立高同士だ。
敵も足りない部員を他の部からのトレードでおぎなってやってくる。
今回も、第一試合は相手のエラーが十八もでて、勝ちをもらった。松高は十五エラーだ。

第二試合は草野球並みの打撃戦――。日没コールドの四十八対四十二……。だれがヒットを打ったのか、打った本人でも思い出せないほど打ちまくった。

松高の七十六安打中、ノーヒットは四番の土屋昇だけだった。

だが、三試合目ともなると相手の格が違う。そろそろシード校と対戦しなければならない。

ここらで、松高の夏の野球は終わりを告げるのだが――。

なんと、相手のシード校が、合宿の集団下痢で欠場の不戦勝。

四回戦は、相手チームの送迎バスが球場に向かう途中、追突事故で遅刻。これも不戦勝――。

あれれと思う間もなく第五回戦――。

この試合は、相手チームの国土館(こくどかん)が、松高に勝てば第六戦で対戦する予定の京帝高校のピッチャーを意識した。それと対決するために、一線級と二線級を温存、いわば松高をなめてかかったら、これが大誤算だった。気がつけば、乱打戦の末、五回までに九対八の一点差で負けている。

あわてて一線級をつぎ込んだが、突然の大雷雨。球場が使用不能のコールドゲーム。

松高の生徒は誰(だれ)一人、明治神宮へ、デイトに行ったことはあっても、お参りに行ったことはないはずなのに、まさに神風が吹いてしまったのだ。そして、そろそろ周りでミラクル松高の名がささやかれはじめる。

さらに国土館が大警戒した第六戦の京帝の、たった一人しかいないワンマンピッチャーの江

東投手は、前日の試合で打球を腕に受け、骨折していたからたまらない。
それでも根性！　歯を食いしばって下手から投げた。
いくら涙をさそう熱投ではあっても、下手投げではソフトボールと同じだ。
ゆるい球なら松高生もなんとか当てることができた。
それでさえ十対八のあわやという点数差で勝利してしまう。ここいら奇跡（ミラクル）のバーゲンだ。
そして、第七戦が優勝候補№1の本大十高……。ああ！　ここでも奇跡は止まってくれない。
なんと、本大十高は、高校野球名物の不祥事（ふしょうじ）で出場を辞退してしまったのだ。
なんでも、チーム全員が松高との試合に勝利を確信、たががゆるんで試合の前日、部室で大酒盛りをしていたのが見つかってしまったのである。
こうなると、八試合あるはずの決勝進出への道を、気がつけば、三勝二コールドゲーム三不戦勝で乗りきっての決勝戦——。
万が一勝てば、東東京地区、空前絶後の都立高校の甲子園行きが実現する。
けれど、誰も松高の勝利を信じてはいない。
なぜなら、本大十高の欠場でがぜん優勝候補におどり出た本大四高が対戦相手なのだ。
実力からいえば、プロ野球と幼稚園の三角ベース以上の差がある両チームである。
ここで奇跡が起こったりしたら、真面目（まじめ）に働く日本のサラリーマンはどう生きていけばいいのか？　この世に神や仏はいるのか？
こんなラッキーがこの世に存在するとしたら、おそらく世の中に絶望し激怒し、通勤の満員

電車に放火しかねない驚異の奇跡だった。

だが、起こるものは起こってしまうのだ。

まず松高のピッチャーがいつもと違っていた。

いままで出場したことのない男がマウンドに立っている。

うの目たかの目で有望選手を探していたプロ野球のスカウトたちは、目の玉がひっくりかえって、ひらめの目、かれいの目になってしまった。

松高のピッチャーズマウンドに立っているのは、スピードガンの球速一四七キロの剛球投手だった。

誰もマークしたことのない無名の選手だ。

速見健は、九回裏、二人目の打者に第二球を投げる。

ドスン！

今、一四八キロのストレートだ。

「ストライク！　ツー！」

あと、四つのストライクで甲子園だ！

……なんであいつが出てくるんだ……

いまだに浩はちんぷんかんぷんだった。

実は浩は東東京大会の始まる前に速見健に野球部入部を勧めにいったことがある。

健は、二年のとき大阪のＬＰ学園から松高に来た編入生だった。

ＬＰ学園といえば、押しも押されもせぬ野球の名門校だ。そこの生徒だったら当然、ボールの握り方ぐらい知っていると浩は思ったのだ。けれど、健は断固断った。
健にいわせると、野球をしたくないから、松高に転校してきたのだという。
「一生、野球をしないわけじゃないさ。もちろんプロになるつもりだよ。でもね、ＬＰなんかにいたら、練習、練習……。おまけに甲子園なんかに出てみろよ、連投、連投、プロになったときには選手寿命がちぢまっちまうぜ」
「でも松高じゃ、練習はおろか甲子園なんて夢のまた夢だよ」
そう、浩がいうと、
「ここで野球をする気はないさ。今は筋肉トレーニングの時期……。球は握らないよ。今、下手に目立って、ドラフト会議で、行きたくもない球団に指名されちゃたまらねえ。俺は、契約金でもうけようとは思わないんだ。テスト入団で、三年後にゃ、マウンドの上で一億かせいでやるさ」
健はニヒルに笑って浩の前を通りすぎていったのだが、
「なんで今になって出て来るの？……」
ほんの一時間半前、呆然としていた浩に、裕子が胸を張っていった。
「わたし、あきらめなかったもん。なんてったってＬＰの生徒でしょ。ＬＰは野球をやんなきゃなんのために行っているのか分かんない学校じゃない。わたしね、速見君のこと調べたの

……そしたら、一年のときに一回だけ、ＬＰの紅白試合に出たことがあるのよ。一対〇で負けたけど、三振十個だって……なんたって十個よ！　しかも高校一年のときになの……。おまけにＬＰって、野球部員だけで五百人もいるわ。紅白試合に出るのだってＮＨＫばりの難関よ。そのなかで十個三振なんて奇跡（ミラクル）よっ……」

ここでも奇跡が出てくる。

「しかもね、速見君にいわせると、人目につきたくないから、手かげんしてわざと負けたらしいわ」

「キザだねえ……」思わず浩は呟いた。

「で、わたし、こっそり野球部に速見君を登録しておいたわけ……。いつか使える、いえ、使ってみせましょうってね」

……それでもって、まあ、今の結果なのだが。どうやって速見をくどいたのだろう……

＊

パスン！

健のボールが、キャッチャーミットに叩（たた）き込まれる。

「ストライク、バッターアウト」

グォーン！　と歓声があがる。

あと一人だ。

「おい裕子」
ダッグアウトの上からショートカットの女の子がさかさまにのぞいた。
「あと一人だ。チアコンパニオンの親玉としては、客席で応援したらどうだい？」
男ものジーンズを着たボーイッシュな女の子だが、公園通りですれ違ったら、十人が十人、男も女もふりかえるだろう、クールビューティだ。
しかし、その顔に化粧っ気はまるでない。
三田けい子、松高三年生。
この女の子が渋谷一帯の高校で黒猫と呼ばれるスケ番だと知ったら、誰もが上がり目下がり目、ぐるっと回ってキャッツアイだ。
そのくせ、けい子は松高の生徒会の生活指導委員なのだ。
松濤高校は都立だけに制服がない。
女の子は、渋谷の街に出ると、それこそ高校生か大学生かＯＬか見わけがつかなくなる。
それだけに盛り場の誘惑も多い。
ともかく渋谷はナンパの名所だらけなのだ。
日本中のナンパめあてがやってくる街だといっていい。
「好きなら別にナンパされたっていいけど、男にだまされるのは困るもんね」
けい子は、いってみれば、男たちの毒牙から高校の女の子を守るような役どころだった。
額の広いけい子は、松高の女の子のほかにも渋谷の高校生をずいぶん助けていた。渋谷の黒

猫は、女子高生にとってたよりになる私設ガールコップだった。
もちろん、学校側は、けい子がスケ番などということは知らない。
そして、今日のけい子は裕子が臨時に集めたチアコンパニオンの一人だった。
「OK！　オーライ、やりましょう！」
裕子はあっさりとスカートを脱ぐ。
下は赤いレオタードだ。
裕子はダッグアウトの屋根のへりに手をやると、きゅんと坂あがりして屋根の上へ出た。
駆け寄ったもう一人のレオタードの女の子からポンポンを受け取る。
「サンクス、久美！」
「バッチリ、TVに映るわよん！　ああステージが私を呼んでいる」
藤久美がVサインを出す。
野球のなりゆきより、TVの中継に、応援している自分が映っていることにエキサイトしている。
久美はチアコンパニオン常任部員兼放送アナウンスクラブ兼ポップス同好会兼演劇クラブ……。美人というよりくしゃっとしたシャム猫のようなファニーフェイスだ。
渋谷の宇田川町のパチンコ屋の角にあり、小さいながら渋谷で一番売れているという煙草屋の娘で、客にじろじろ見られることには慣れている。
いや、むしろカイカーンなのだ。

どこの高校にも、アイドルを夢見て、デビューやオーディションやフェイムを愛読している女の子がいる。
久美は十七歳、すこしアイドルにはとうがたちすぎているが、それでもめげずに夢みる少女のつもりだ。
「さあ、みんな、ラストチアリング」
裕子がポンポンを振る。
けい子が叫ぶ。
「あと一人！」
まるで、ローマの競技場で処刑者の処分を指示する皇帝のように、たてた親指を下に向ける。
キャーッ！
鈴なりの観客席から黄色い歓声（イエローチアー）があがる。
思わずテレビカメラがそちらを向く。
本大四高の次打者、ピッチャー藤石もポカンとそちらを向く。
審判も今日数十回目の呆然フェイスを客席に向ける。
客席の一角を陣どっているのは、セーラー服の大群だ。
それも、女学館から実践、青学、渋谷女子高……、セーラー服コレクションベストテンの常連の大群だからたまらない。
別に彼女たちは松高を応援に来たのではない。

彼女たちのボーイフレンドリストに慶応、麻布はあっても、松高はシステムされていない。
渋谷のガールコップ、黒猫けい子が動員力のすごさを見せつけたのである。
「野郎ども、女の子に負けちゃいられないよ」
こういってすっくと立ちあがったのは、いきな浴衣(ゆかた)の女の子、これまた臨時チアコンパニオンの山野マキだ。
「あと一人！」
「あと一人！」
「とったれ」黄色にかわって黒い歓声。
「かましたれ！」八九三拍子だ。
セーラー服の隣の一角が揺れた。
パンチパーマや丸刈のおあにいさんの一団だ。
かれらにも制服があるらしく、みんな一様に、ディマジオ、ピアスポーツ、ブラックピアのブランド商品を愛用である。
渋谷の円山町にある渋谷区地元活性会の面々であり、その会長、山野富三郎の娘がマキだった。
つけ加えておくと、渋谷区地元活性会とは、古くから渋谷になわばりを持ち、近ごろのその手の大企業進出とともに、勢力範囲が小さくなりっぱなしの、早い話が、落ち目ヤクザの組(カンパニー)の別称である。

最近、組は元気がないとはいえ、親分のお嬢さまの母校のでいりだ。張り切らざるをえないのである。

いつものドスやピストルを、ウチワやメガホンに持ちかえて、血を吐くようなしわがれ声で応援している。

「うーん、盛りあがってきた。わたし大好き、こういうの」

白いパラソルを持ったレースの服の女の子が優雅に微笑した。

大山知保――松高三年、松濤の大邸宅の一つに住む大山代議士の孫娘だ。

知保はバッグの中から銀のスフラン・フラスク（酒のポケットボトル）を出し、グビリと飲むと、

「やれ！　やっちまえ！　あと、一人ッ！」

立ちあがって絶叫する。

彼女もまた、松高チアコンパニオンだ。

そして、レオタード姿ながら、客席を三台の一眼レフを肩にかけて飛びまわって連写しているのが、五月女由起子。松高写真クラブ――。

応援より写真に夢中だ。

さらにチアコンパニオンを数えれば、赤いファイロファックスの六穴システム手帳で、さかんに何かメモっている色白で長い髪の女の子が、村上直美――松濤の成績No.1生徒だ。

そして、その横でまるでブラックホールのように、静かに下を向いて、スコアブックをつけ

ているのが、可愛いくせに目立たないことで有名な、中志津。いつも八の字に下がって泣き出しそうな眉が、一部の男子生徒にやたらと好評である。

だが、志津が男の子と声をかわしたところを目撃した者はいない。

それほどシャイで無口なのだ。

これがチアコンパニオンのめぼしいところだ。

さて、応援の盛り上がりで一時中断した試合が、いよいよ再開された。

本大四高の藤石が食らいつくようにボールを待ちうける。

一球目、もちろんストレート。

スピードガンは一五〇キロ!

グシャッ!

バットに当たった。

ファールだ。

ボールは審判の肩をかすめて、バックネットにつきささった。

第二球、ストレート。スピードガンは一五二キロ!

グシューン!

またバットに当たった。

ファール。

球はバックネットを直撃する。

あと一球。
ゴクリッ！
かたずを飲む音が、球場中に聞こえる。
そのとき、赤いファイロファックスの直美がスッと立ち上がり、裕子の傍に来た。
「危ないわ」
「えっ？」
「相手のバッター、タイミングがあってきている。次のストレートは打たれるかも」
「だって一五〇キロを超えているわ」
直美は、首を振った。
「相手は、優勝候補の四番よ。いくら球が早くても、いつも同じコースに直球だけでは、三回もまわれば慣れてくるわ」
裕子は意外そうに直美を見つめた。
「直美、あなた、野球のことは知らなかったんじゃないの？」
直美は成績No.1。野球は無縁の人のはずだ。
「ええ、二週間前まではね。でも、こんなにつきあわされたら、わたしだって慣れるわ。おそらく敵の四番も……」
裕子は不安げにピッチャーズマウンドの健を見つめた。
「ここは別の球種を投げるべきだわ」

直美が呟く。

別の球種って……健が、ストレート以外を投げたのを見たことがない。

だが、しかし――。

マウンドの健は不敵に笑った。

そして、ボールをバッターの藤石に見せた。

ボールをはさんでいる。

フォークの握りだ。

バッターに球種を知らせている。

そして、キャッチャーに低くかまえろと合図した。

「なめやがって……」

藤石の顔は怒りでまっ青だ。

健はふりかぶった。

投げた。

落ちた。

ストンとキャッチャーのミットの中へ。

藤石のバットは空を切った。

健は呟いた。

「フォークはこう投げるんだぜ」

S
松

二十七奪三振――。
そして甲子園出場――。
マウンドにナインが駆け寄る。
飛びつこうとするキャッチャーの南に、
「南チャン、喜びすぎはいけねえ、高校野球じゃ、それも不祥事にされかねないぜ」
そういってニヒルに笑うと、客席の裕子に親指を立てて見せた。
裕子は、ぽっと溜め息をついた。
「あーあ、やられちゃった」
マウンドには、TV局が新聞記者が殺到する。
奇跡の松濤が、奇跡をなしとげた。
さあ、次は甲子園だ！

＊

……甲子園は仕方がないとして……。どうも気になる……
神宮からの帰り道、浩は裕子に聞いた。
「けれど速見の奴。野球部を嫌がっていた奴が、よくあそこまで頑張ったなあ……。行きたくないはずだろう？　甲子園に……」
「エサがよかったもん」

「エサ？」

裕子はそれには答えず、浩の肩を叩いた。

「さ、副会長君、甲子園よ！　甲子園！」

そういうと、前を歩いていくけい子と由起子に手をふった。

「待って！　一緒に例のとこ行こう！」

二人はＯＫのサインを見せた。

「あ、僕も行くよ」

浩が、どこに行くのかも知らずあわてていった。

「わたしたちお風呂に行くのよ。一緒に入る？　お背中、流そうか？」

「あ、あ……。そか、いいよ……」

「じゃ、明日……ね」

裕子は駆け出した。

ぽけっと、浩は裕子を見送るのみだ。

＊

流れでる汗が気持ちよい。

裕子は由起子の家のサウナで、のんびりと背筋をのばした。

由起子の家は円山町に古くからある由緒正しい五月女（そおとめ）というラブホテルだった。

最近のラブホテルは、明るく健康的なみんなのホテルを目指しているところも多い。

サウナや健康器具を備えている部屋もある。

銭湯の少なくなった今、裕子やけい子はラブホテルの広いバスタブやサウナをよく使わせてもらっていた。

「けどさあ」

隣に坐っていたけい子が聞いた。

「どういうエサで、あのピッチャーくどいたわけ」

「三振一個キス一回、けど予想外よ、二十七回じゃ、きっとくちびるがおかしくなっちゃうわ」

「ずいぶん、古風なくどきだね」

「キスだっていろいろあるわよ」

「そりゃそうだ。よく消毒しなよ」

「それがさあ……」

裕子がぽつんといった。

「どしたの。もうなんかうつされたの？」

由起子が身を乗り出した。

「写真じゃないつーの。あいつったらね。ガキっぽいことチュンチュンやってられないよですって……。甲子園で優勝したとき、ランクの高いのを一回でまとめて頼むぜ……、だって」

「よくいうよ」とけい子。
「ねぇーっ……」と裕子。
「で、なんて答えたの？　裕子は……。うちの一泊、割り引き券、あげようか？」と由起子。
裕子はクスッと笑って答えない。
「生活指導委員としては聞く権利があるわな……」けい子がそういってクスリと笑った。
「あいつ、甲子園で優勝する気らしいわ」
「あらま、そーゆーこと？」
由起子がポカンと口を開けた。
「そういうこと……」
裕子はサウナから飛びだして、冷水プールに飛び込んだ。
由起子は、開けっ放しの口をやっと閉じてから、
「ま、いいか……。一回ぐらい……。平均年齢だもんね」
けい子は、ショートカットの髪をポリポリかいた。
「近ごろの若いもんにゃ、ついていけん」
けい子と裕子の年の差は二カ月だった。

＊

翌朝。

裕子は、眠い目をこすりながら店のシャッターを上げた。
きのうは由起子の家で、けい子と三人で、サウナの後のビールを飲んで夜ふかしがすぎたようだ。
裕子の家は、宇田川町のビルの谷間で小さなスポーツ店を経営している。
予算など全くないといっていい野球部の部長をしているのは、自宅から安い道具を手にいれられるためもあった。
もっとも裕子の家自体の暮らしは、だんだん楽なものではなくなっていた。
大企業の進出で、スポーツビルともいえるスポーツ用品店がいたるところにできて、小さなスポーツ店を圧迫していた。
すでに、渋谷をひき払った小さなスポーツ店はいくつもあった。
地上げで地価が高くなり、その税金だけでも楽なものではなかった。
裕子の家も、古くからこの土地に住みついている住民とのつながりで、細々と営業しているといっていい。
その住民たちも次々と土地を売って出ていってしまう。
最近、裕子の家では、茶の間で土地を売る話題が出ない日はなかった。
昨日も、土地をはなれたくない祖父と、売りたがる父との間でいさかいがあったらしい。
裕子にとって、そんな茶の間にはあまりいたくなかった。
とはいえ、友達の家に遊びに行って遅くなって帰ると、しつけには厳格な父から大目玉を食

う。

……ふんだりけったりだわ……

いつも高校でははつらつとして見える裕子も、家を出るときは気の重い顔をしている。

……けれど！　気を取りなおさねば。なにしろ、わが野球部が甲子園なのだ。がんばらねば！……

裕子は、自分のほっぺたをパシンと叩くと学校に向かった。

＊

その日の新聞……、とくに東京都内版は大騒ぎだ。

なにしろ都立高校が東東京地区で甲子園に出場するのは、史上初めてだった。

だが、松高生は盛り上がったものの、街の反応は「あっそう……。よかったね……」程度だった。

ほかの土地からのよせ集めの街の人々は、松濤高校が渋谷のどこにあるかも知らぬほど、地元意識がなかった。

そして関心がないどころか、この事態に困惑している人たちがいた。

しかも、それは松濤高校の中にいた。

＊

「はあ〜っ！」

校長の山田孫六は大きな溜め息をついた。

「どうします？　費用は……」

「甲子園へ行くには膨大な費用がかかります。選手だけならともかく、応援団やら宿泊費やら……。ざっと見積もっても、うん千万円……」

教頭の原島大作が計算機を叩いた。

「どっから出すんです。そんなお金」

「ま、普通は、ＰＴＡとか地元有志とか……」

「しかし、授業料が安いから持っている都立高ですぞ。三年前に修学旅行すら止めたぐらいですからな」

校長は、また大きく溜め息をついた。

「松濤町は、大資産家ぞろいです。何人かの有志が現れるかも……」

「しかし、一部の資産家から受けたのでは、ひもつきということになりませんかな。やはりこは、ＰＴＡに公平に出していただかなければ……」

「松濤町だけならともかく、円山、宇田川、神南……。今や地上げや大手業者のしめつけで苦しんでいる家が多いんです。それに、こう立ちのきが多くて、こうも地方からの流入者が多いと、地元に対する愛情もうすくなっています。もう、この地区は、おらが町ではなくなっています。日々、人の流れる大商業地ですからな」

「渋谷駅のハチ公の前で松の枝でも配って、募金運動でもしますか」
「松濤高校は、名にしおう名門校ですぞ。生徒は三流でも……。そんなみっともない真似はできません」
「お金ですか……。校庭のほんの一部でも売れば、一億ぐらいすぐですがねえ」
校長は窓の外を見つめた。
「都の所有地です……」
校長が思わず吐き捨てるようにいった。
「だいたいですよ！　都立高が甲子園に行くことはないんです。そんなことは野球校にまかせればいいんです」
「とはいっても理由もなく辞退するわけにもいきません。マスコミがうるさいし、第一、高野連（高校野球連合）が黙っちゃいませんよ。なにしろ、どの高校にも参加する権利はあるんですからなあ……、専門校や定時制以外は……」
校長たちの話題は、お金の問題に終始した。
「いっそ、渋谷の大手企業に頼みましょうか。東急とか西武に……」
「松濤ライオンズになってしまいますぞ……」
「どうして、私の在任中にこんなことになってしまったんでしょうなあ」
どうやら、校長たちにとっては、甲子園は大きな迷惑だったようだ。
「なんとか辞退できませんかなあ……」

校長はもう一度つぶやいた。

第一章

謀略の甲子園

渋谷の公園通りの中ほどにあるパルコ・パート1のわきにある道をペンギン通りという。
その通りをほんの少し行くと、鉄材がむき出しになった未完成のビルのような映画館がある。
ここ数年、このかたちのままだし、映画館に客も入っているから、どうやら未完成ではなく、いわゆる前衛芸術風のビルというやつらしい。
昔はこの映画館の場所にぽつんとラブホテルがあり、その横の渋谷に抜ける暗い小さな坂を、人目を忍んだ恋人たちが、人生の悩みを全てしょい込んだような暗い顔で通り過ぎていったものだそうだが……。
今、坂はいつの間にか階段になり、おしあいへしあいの人の波が、のろのろと上下している。
階段のまわりには小間物屋（ファンシーショップ）やスナックやパブ、レストランが目白押し、誰（だれ）がつけたかスペイン坂……。
どうやらローマのスペイン広場を真似た名前らしいが、もちろん、ローマの休日のオードリー・ヘップバーン風をさがそうとしても無理である。
観光客風ローティーンと、地方出身のヤングカップルがうじゃうじゃうじゃの子供の国（キディランド）……。いっ

てみれば、原宿の竹下通りのミニチュア版といえるかもしれない。

最近はこの坂を知らないと、中年どころか江戸時代の生まれじゃない？　といわれかねない渋谷の名所だが、松高生にとっては、公園通りから井の頭通りを抜け、センター街から渋谷駅へ通じる単なる近道にすぎなかった。

だいたい、地元の人間というものは、あまり有名になりすぎた場所で買物や立ち食いや、つまみ食いのデイトはしないものだ。

誰に見られ、何をいわれるか分かったものではないからだ。

だから当然、松高野球部四番ライトの土屋昇がスペイン坂を足早に駆け降りていくのも、週一回の買物帰りの近道のつもりだった。

その買物というのも、昇としてはいささか気恥ずかしいのだが、公園通りのコージーコーナーという洋菓子店の百円大型シュークリームなのだ。

昇は子供のころ、両親を事故で失い、今は井の頭線の渋谷駅のガード下でやきとり屋をやっている昇のおじいさんと一緒に住んでいるのだが、このおじいさん、飲み屋をやっているくせに大の甘党で、しかも、コージーコーナーのシュークリームしか食べないというのだから仕方がない。

どこのスーパーでも手に入りそうな、要するに卵で黄色くなった古いタイプのクリームの入ったシュークリームなのだが――早い話が、井の頭線の駅の下の不二家でも手に入るタイプのシュークリームだ――、違いの分かるご老体には、こたえられない味なのだそうだ。

まして、今どきの、生クリームやらフルーツ入りのシュークリームは、おじいさんにいわせれば——許せねえ、きさまら人間、おっと、シュークリームじゃねえ！——ということになるのだそうだ。
ま、どっちにしたって、十個千円のシュークリームで、五千円の小遣いを頂けるとあれば、おじいさんの味覚に文句もいえない。
もっとも自分が食べると誤解されると、高校中の物笑いになりかねない昇としては、丸井の下のドトールという百五十円コーヒーショップで孤独にエスプレッソをたしなむのが一日で最も至上の時だ……などといって、その帰りに、いつも一人で人目を忍んで、コージーコーナーのシュークリームを買っていたのだ。
さて、昇がスペイン坂のハンバーガーショップ、ファースト・キッチンの前に来たときだ。
いきなり、肩にぶつかった男がいた。
「ごめん」
昇は軽くそういって相手の顔を見ずに歩き始めた。
人の多いこの通りで、人とぶつかるなんていつものことだ。気にもかけなかった。
「ごめんですむと思ってんのか？」
背後でどすのきいた男の声がした。
「えっ？」
思わず振り返った昇の前に、雪駄(せった)をはき、白いスーツに黒メガネの男が立っていた。

今どき、どんなローコスト日本映画、いや、AV（アダルトビデオ）にさえ出てきそうにないその筋スタイルのあにさんだ。

ましてこのスタイル、スペイン坂のチャイルドアダルトファッションの中では、小劇場の不条理劇さえ超えている。

廃品寸前の商品番号八九三（やくざ）番が頼みもしないのに配送された感じである。

男はいきなり昇の胸ぐらをつかまえた。

「てめえ、どこの高校だ？」

「え、あ、松濤高……」

そこまでいって、しまったと思ったが、すかさず昇はいった。

「お金なら右のポケット……」

だいたいこういう場合、金をせびる奴（やつ）がほとんどだ。どうせ財布には五千円も入っちゃいない。

これぐらいで片がつけば御（おん）の字だ。

なにしろ東京じゃ、こういうとき、どんなにまわりに人がいたって助けてくれる奴（やつ）はいない。それが常識だ。

案の上、スペイン坂の人だかりは、この狭い道ではそしらぬ顔もできず、遠まきにして昇たちを見つめている。

「テレビのロケじゃない？」

「誰？　あの俳優……？」
などと、のんきなことをいっているカップルもいる。
……ほら、見ろ。思ったとおりだ……
なにしろ、東京には、どんなおかしい奴がいるかも分からない。
意味もなくホームから人をつきおとしたり、通りがかりの人を刺し殺したり……。ともかく知らない男が近よってきたら危険と思え、女ならなおさら病気を疑え。
ガード下のやきとり屋を長年やってきたおじいさんからそう教わってきた昇だ。
だが、場慣れたはずの昇も、男の次の言葉を聞いて背筋が凍りつく。
「金だとオ？　てめえ、おちょくってんのかあ」
男は、ぐいっと、昇をファースト・キッチンの壁に押しつけた。
顔面に向けてこぶしを降りあげる。
昇はふと思った。
……こぶしかあ――、刃物でなくてよかった――、打ちどころさえ悪くなきゃ、命は助かる……
昇は目を閉じた。
そのときだった。
「待ちな」
男の手ががっちりと握られた。

「ちょっと、おとなげないんじゃない？」
昇には聞き憶えのある声だった。
それも女の声だ。
昇は目を開けた。
〝いよッ、出ました！　渋谷の黒猫！〟
昇が殴(なぐ)られそうな当事者でなく、ボサーッとした通りがかりの見物人(サイトシーイングパサー)なら、思わず掛け声をかけて拍手をしただろう。
渋谷在住の女子高生がいたら黄色い歓声の嵐(イエローシャウトストーム)（略してイエスト）するところだ。
渋谷の黒猫——そう、そこに立っていたのは、夏だというのに黒い革ジャン、レイバンのシューティングをグラサンした松高生活指導委員の三田けい子だった。
なに、レイバンのサングラスだからってビビることはない。新宿西口メガネでは半額以下だ。
しかし、どこの製品か分からない黒い革ジャンは、見くびってはいけなかった。
ずいぶんよれよれだが、手入れはよく、年期が入っている。
手にはチェーン？　いや、ごく普通の買物のときにもらうビニール袋を持っていた。
けい子は学校の帰り、道玄坂の百軒店にあるムルギーという渋谷に古くからある壁の落ちかけたようなレトロなカレー専門店のカレーを五人分テイクアウトした。
けい子は公園通り裏のマンションになぜか一人で住んでいる。
冷蔵庫に入れておけば日持ちするカレーは、一人暮らしに向いていた。

それにムルギーのカレーは、本格インド料理ほど辛すぎずしかもあっさりしていて、けい子好みだった。

けい子は道玄坂を降りて来て駅前の第一勧銀に寄り、カードでお金を降ろし、ついでに宝くじを一枚だけ買った。

宝くじは当たらない。

スケ番やっても、やばいことには当たりたくない。

そんなお守りのつもりだった。

だが、今日は妙なものに当たってしまった。

けい子も、駅前に出たときはスペイン坂を近道に使っていたのだ。

商品番号八九三は、けい子を振り返り、ニヤリと笑った。

「なんでェ、女じゃねえか。なんでメスッ娘がわいを止めるんでェ、ホワイ?」

顔に書かれた卑猥がブローアップされていく。

けい子はポケットから宝くじを出した。

「これで機嫌をなおして……ねっ。あなたがラッキーなら、一千万円当たるわ」

「ざけんじゃねえ」

八九三番は、宝くじを破り捨てた。

けい子は肩をすくめた。

「それを捨てたあんたにゃ、もうラッキーはないよ」

「へん。ラッキョーがあればいいさ。ラッキョーと玉ねぎはむくに限る」
「玉ねぎはむくと泣きの涙を見るよ」
「ヒーヒー、泣かしてやるぜ！」
八九三番はけい子につかみかかった。
そのほおに平手打ちが飛んだ。
「安く見るんじゃないよ。玉ねぎほどね！」
けい子の声はずしんとドスが効いている。
「ほう……」
野次馬からどよめきが起こった。
「こりゃ、やっぱりロケだよ」
「どこの新人？　あの子」
周りは、あくまで無責任そのものである。
しかし、これだけの群衆の前で、女の平手打ちを食った男は、頭に血が昇った。
内ポケットからナイフを取り出した。
けい子は、ふっと笑った。
「止めたほうがいい……。玉ねぎは手でむきな」
「うるせえ」
男はナイフでけい子につっかかっていった。

だが——。
ナイフが切ったのは、けい子の持っているカレーの袋だった。
「キャーッ！」
群衆から悲鳴が起こった。
飛び散ったカレーが、彼らの服に降りかかったのだ。
この日のデートのために用意しただろう一張羅(サンデーベスト)の服の上に——。
群衆は、けい子と男の乱闘より、服のしみを気にした。
ガチャーン！
ファースト・キッチンのガラスが割れた。
次の瞬間、
「おぼえてろ！」
その叫び声を残して、顔中、シュークリームをなすりつけられた男が、群衆をつき飛ばしながらスペイン坂の階段を駆け上って逃げていった。
つきとばされた何人かが、階段をふみはずし、悲鳴をあげた。
ねんざをした人もいる。
スペイン坂のすぐそばの交番から、警官がやって来たとき、そこにはぼんやり立っている昇と、ファースト・キッチンの店員に、しきりにガラスを割ったことをあやまっているけい子がいた。

*

「どうして！　どうしてこうなるの……」
裕子は朝からこの言葉ばかりを繰り返していた。
例の事件の数日後、高校野球連合、略して高野連から松濤高校への通達があったのだ。
――かくのごとき不祥事を起こした以上、貴校は何らかの責任を取るべきと考えます。高校野球は、純粋かつ健全なる学生の祭典であり、これを汚すことは何人も許されません。前向きの善処を期待します――
校長は、ふーっと息を吐き出し、書面をポンと叩いた。
「早い話が出場を辞退しろということですな」
「はい。高校野球史上、この通達が来て辞退しなかった高校は、一校もありません」
教頭は、もみ手ほくほくで、願ってもないことだとでもいうように頷いた。
「しかし、不名誉なことですなあ。わが校生徒が、やくざと乱闘……おかげで甲子園辞退――」
「処分すればいいんです。とかげの尻尾を……。一人ですみます。一人で……」
会議は五分もかからなかった。
こうして松濤高校は甲子園出場を辞退。三田けい子は退学処分……、土屋昇はむしろ事件の被害者であるから、おかまいなし――

野球部とチアコンパニオンの一同は部室に集まった。
「ふざけんじゃないよ！」
野球部室で昇はこぶしでロッカーを叩きつけた。
ドアがはじけた。このパワーがあれば、一人であの八九三番を処理できたかもしれない。
だが今はもう後の祭りだ。
「俺が無罪だったら、なぜ甲子園を辞退するんだ。けい子ちゃんは野球部じゃないんだぜ！　それにさ、俺が被害者なら、けい子ちゃんは、俺を助けたんだぜ！　なぜ助けた奴が退学なんだよ！」
だが、学校側はそれには何も答えてくれない。
「だったら俺も退学してやる！」
いきりたつ昇をなぐさめるように、そして、まるで何ごともなかったように、けい子はいった。
「よしなよ。あんた大学に行く気だろ。それに、ガード下じゃ、おじいちゃんがお店をやってる。あすこらへんのお店は、いつ立ちのきになるか分かんないじゃないか。いくら高い立ちのき料を貰ったってさ、地元で商売やってる人には、よその土地はやりにくい。おまけに、億単位の立ちのき料が入ればさ、知らない親戚がどっとふえて、金を借りに来る。借さなきゃ、人でなしと悪口をいいふらされる。ここいら、立ちのきのパターンだよな。だからさ、あんたがしっかりしなきゃ。三流でも四流でも、ともかく大学入ってりゃ、なんとか生きてける世の中

じゃん」
「そういうけい子は、どうするの」
裕子が聞いた。
けい子はふっと微笑した。
「へへ……、今だからあかそう。三田けい子の出生の謎なんちゃって……。要するに、よくある話の某政治家の二号ならぬ五号の娘が、わたし……。まあ、ママが死んじゃっても、養育費が第一勧銀に払いこまれているから、文句いわないけどね。けど、大人になってまでそのおっさんに頼りたくないもんね。一人でやるにゃ、大人になってからじゃ遅い。ガキのころからいろいろ用意しなきゃね……。で、いろいろやっていつの間にか、渋谷はわたしの庭になっちゃった。ま、高校出なくたって、やっていけるわよ。少なくとも、人の二・三・四・五号なんかにはならないわ」
「けい子……」
裕子は、素直に尊敬のまなざしでけい子を見てしまった。
小学校から一緒だったのに、考えてみれば、けい子の素性を何も知らなかったのだ。
不良のようで、人が良くて、人なつっこくて、さみしがりやで、でも、夕方になるとどこかに消えていく友達——。
考えてみれば、あまりにおさないころからの友達は、友達であることが大切で、家がどんな事情かなど気にもかけず大人になってしまうものかもしれない。

友達の結婚式に出席して、初めて友達の家がどんな仕事をしていたのか分かるってこと、よくあるって聞く。
「だから、わたしのこと気にしなくていいの。高校にいなくたって、渋谷にいれば、わたしに会えるわ。きっとね」
「いいえ！」
裕子はきっぱりと言った。
「けい子を退学にはさせません。いい。副会長！」
いきなり裕子に声をかけられ、浩は、
「あ……、あ……、え？」
「校長にかけあうのよ。生徒会の腕の見せどころでしょ」
裕子はまくしたてる。
「わたしたちは、甲子園を失ったのよ。ばかばかしい事故で——。そうよ、事故よ。もし、けい子が助けなければ、土屋君はどうなっていたのよ。わが松濤野球部の唯一のライトは——殴られどころが悪ければ、死んでいたかもしれないわ。そうなったら、やっぱり甲子園には笑っては行けない。忌中で辞退すると思う」
仮の話でも、殺されるのは気持ちがよくない。
昇は、思わず、殴られたはずのあごをさすった。
裕子は続けた。

「でも、それにしたってよ。甲子園を失ったうえにけい子まで失ってたまるものですか！」
そのときだった。
成績№1の村上直美が手に持った赤いファイロファックスを見つめて、ぼそりといった。
「でも、ちょっと変ね。この事件……」
「あん？」と一同。
「ええ。この事件の経過をメモして推理していたんだけれど、まずね、土屋君に殴りかかっていた人——最初にこういったのよね。——てめえ、どこの高校だ——そうでしょう？　土屋君」
「ああ、確かにそういっていた」と昇が頷く。
「知り合いでもない人が、どうして土屋君を高校生だと分かったのかしら。スペイン坂は修学旅行のコースでもないし、多いのは大学生とか大人のカップルでしょ。まして、平日の夕方、通りがかりの男に、てめえ、どこの高校生かは、ないんじゃない？　だって、わたしたちの学校、制服じゃなくて私服なのよ」
「あっ……」一同は顔を見合わす。
「いっちゃ悪いけど、土屋君、体は大きいし、不精ひげははやしているし、とても高校生には見えないと思う」
そういえばそうだ、と昇は思う。おじいさんの店を手伝うときも、客はみんな、昇を十代とは見てくれない。
ふけたイモ高校生——。

十代だと分かったときに、こういって笑う失礼な酔っ払い客もいる。
「それに……」
直美が続けた。
「松濤高校といったら、お金もとらずに、なぐりかかってきたんでしょう？　まるで、土屋君を松濤高校生と知って、いちゃもんをつけて、いちおう校名を聞いてその確認をしたとは思えないかしら」
「何のためにだい？」
けい子が、直美の顔をのぞき込む。
「まだ、不明……。そこまでは……」
直美は、パタンとファイロファックスを閉じた。
久美がすっとんきょうな声をあげる。
「こわいわん。わたしたち、松高生は姿なき通り魔から、狙われているのかしら……」
久美は、ぶるるとふるえて、
「狙われた学園……。薬師丸か原田知世ちゃん……。あーあ、わたしも古いなあ……」
……本気で恐がっているのだろうか、この娘は？……
浩は首をかしげてしまう。
「見つければいいのよね。その男を」
裕子が、いつものきっぱり口調でいった。

「けど、警察だって捜(さが)しているだろう？」
一同はフーッと、溜(た)め息(いき)をつく。
浩は常識的なことをいって、盛り上がってきたみんなの気持ちに水をかけているのに気がついていない。
けい子は肩をすくめた。
「渋谷じゃね。おどし、かつあげ、けんか、こんなのはいつものことさ。渋谷の警察は、かまってくれやしないよ」
けい子は、ちょっと投げやりにいった。
「だいいち、渋谷に詳しいこのわたしが、見たこともない奴だったんだ。とても見つかりゃしないよ」
今まで黙っていたマキがぽつりといった。
「無理ではないかも……」
「えっ？」
みんなマキを見た。
「その手のチンピラは、専門家におまかせを……。うちには、渋谷以外の同業者関係も、しっかりリストアップしてあるわ」
マキは、いうまでもなく地元活性会会長の娘だった。

さすが情報化社会である。裏の世界も例外ではない。

＊

次の日にはあの男の正体が判明した。
「新宿のチンピラで、通称、平和のヤス。学生相手の雀荘で、せこい賭け麻雀でもうけているらしいわ。わたしが、とっつかまえて叩きましょうか？」
マキの口調はやさしいが、よく考えると、いっている内容は迫力満点だ。
裕子はあわてた。
叩きすぎて、傷害事件にでもなって、こっちのほこりが出てはたまらない。
「退学騒ぎは一人でたくさん。とりあえずは、その男の目的が何だったかを探らねば……」
「わたしにやらせて。一度、退学させられたんだ。二度目はないさ」
と、けい子がそでをまくった。
「あなたは面が割れている。捜査は秘密裏に行われるべきだわ」
裕子は、刑事物気取りの口調になった。
「じゃあ、僕かい？」
と、浩がおどおどと自分の顔を指さした。
「ノン。男は警戒されるわ」
「じゃあ誰が……」と浩は胸をなでおろしながら聞いた。

「けりをつけるのはわたし……、裕子にまかせろ」
「わたしもいくわ」と由起子。
「なにか証拠をつかむには、プロの腕が必要よ」
と、ミノルタを取りだす。
「レンズは何を持っていく？　四百ミリ？　千ミリ？　三千ミリ望遠までなら、すぐ用意するわ」
「バードウォッチングじゃないの!!」
裕子は即座にそういって溜め息をついた。
……大丈夫かなあ……。やっぱ、ボディガードがいるかなあ……

＊

で、結局、浩もついていくことになった。
ボディガードとしてついていくというより、裕子と由起子につれられていく気分だ。
しかも、男は警戒されるという裕子の意見もあり、結局、レンタルショップアコムで女性用のかつらを借り、裕子の母のスカートを着た。
浩の母のでは、ウエストが合わないのだ。
それに、母親の、息子の成績は悪いが、いちおうノーマルな家庭であるという自負だけは破壊したくなかった。

だが、スカートの幅はともかく、丈が、浩にはミニスカートだ。
仕方がないから、夏だというのにロングコートで身をかくす。
「いつもより　男らしいわ」
裕子は肩をすくめて妙なほめ方をした。
そして、由起子は大砲をあきらめ、片手で持てるハーフカメラのサムライを持ち、三人はマキから聞いた新宿歌舞伎町のホープという麻雀屋の前で待機した。
街角で新聞を読み、黒いサングラスをつけた裕子は、決まりすぎの尾行者スタイルだ。
ハンチングをかぶり、ジーンズで片手にカメラを待った由起子も、ほとんど報道カメラマンだ。
意外にも、浩の格好だけは、同じような格好の男の多い歌舞伎町だけに、不思議と違和感がない。
いずれにしろ、これで平和のヤスを尾行しようというのだから恐れいるが、探偵なんてやったことのない三人だ、少しは大目に見なければならないかもしれない。
待つことしばし……。
マキから渡された写真どおりの男が、麻雀屋からフラリと出てきた。
サングラスも白いスーツも雪駄もはいていない。よれよれのジャケットを着た、ごくごく普通の職業に見える男だ。
「なんであの男が、スペイン坂では、もんもんのわざとらしい格好していたわけ?」

由起子が裕子にささやく。
聞かれて分かるはずもない。三人はじっと平和のヤスを見つめた。
平和のヤスは、煙草に火をつけると、フーッと煙を吐き、それからすぐに煙草を路上に叩きつけた。
おそらく麻雀に負けたのだろう。
平和のヤスは足早に歌舞伎町から靖国通りに出ると、タクシーを拾った。
慌てて、後を追う三人もタクシーを拾う。
「あの車を追って……」と裕子は運転手に叫んだ。
一度、いってみたかった、こういう台詞——。
三人を乗せたタクシーは、平和のヤスを乗せたタクシーの後ろにべったりくっついた。
……これじゃ、気がつかれてしまう……
「あのう、もうすこし、離れて……」裕子ははらはらだ。
「なにいってんです。あの車についていくんでしょ……。離れたらはぐれちまいますよ」
タクシーの運転手にとって、前の車についていくなどいつものことだ。宴会の二次会などで、一人しか知らない店へ数人で分乗していくことはよくある。前の車にはぐれて文句をいわれるのは運転手だ。食らいついても、前の車から離れはしない。
平和のヤスを乗せたタクシーは、明治通りを渋谷に向かったが、三人を乗せたタクシーは、前の車に食らいついて、少なくとも信号無視ギリギリを四回は繰り返した。

もっとも東京では、こんなラフな運転は、しょっちゅう見られるのだが……、東京はいまさらながらこわい街である。
それでも裕子と由起子と浩は、前の車に気づかれまいとして、シートに沈み込んだ。
ブレーキのきしむ音と急ハンドルで体が左右に揺れる。
窓の外を見ることができないから、どこを走っているのか分からない。
……不安……。何が不安って……。
「ねえ、どこ行くの？　この車……」
由起子が聞く。
「知るか……」
裕子が舌を嚙みそうになりながら答える。
「タクシー代は？……」と由起子。
「関東地方以内なら大丈夫」と裕子。
「金持ち……」
「ブヒッ！」
「なによ、それ」
「部費……。部長の特権！」
「ワル！」
「けど、穴うめは私……。だから不安！」

確かに、関東以内といっても、群馬や栃木まで行かれたんではたまらない。
そこらへんの経理問題は、TVや小説の探偵物はどうなっているのだろう。
「ま、足りなくなったら……」
裕子は浩をすがるようなまなざしで見た。
「!!」
こういうときだけすがられても困る。浩はそれでもさいふの中身を思い、青ざめた。
千円札一枚――。
……たよりない、だらしない。それでも男か……
裕子の声が聞こえるようだ。仕方ない。
……だって今は女だもん……、と居直ろうか……
だが、心配にはおよばなかった。
新宿から、おおよそ二千円ほどの距離で、タクシーは止まった。
あたふたとお金を払って、まさにはうように車から出た三人は、目の前につっ立っている二本の足にびっくり！
「なにやっとんのじゃ？　姉ちゃん」
「!!」
平和のヤスが見降ろしている。
気がつけば、三人の乗っていたタクシーは、平和のヤスのタクシーのすぐ後ろ、平和のヤス

が降りたところへ、三人もはいだして来たのだ。
「いえ、あの、その、ども」
立ち上がった三人は平和のヤスにペコペコ。
平和のヤスも思わずペコリで、
「ども」
平和のヤスは、浩の顔を見て、首をひねり、
「ども？……」
「ども……」
浩は裏声でかろうじて答える。
裕子と由起子、あわてて手をヒラヒラさせて、
「アデュチェ（アデューグラッチェ）！　バーイ」
平和のヤスもつられて、
「バーイ」
裕子が浩の腕をぐいっと引っ張る。
「バーイ！」
浩も手をヒラヒラ。
三人は、トコトコと逃げだし、道の壁の向こう側に隠れた。
平和のヤスは首をひねりながら、ひとり言――。

「バーイじゃなくて、ゲーイじゃねえか、今のは……。新しい病気かなあ？　若い女にゃ気いつけにゃ」

だいたいこの男、自分が尾行されている意識がまるでないのだ。

壁の向こう側では、胸の上で手がはずむほどドキドキした気持ちをやっと落ちつかせて三人がふと気がつくと……、

壁の中から声が聞こえる。

「ハイ、ショート！」

カシーン、明らかに球を打つ金属バットの音だ。

「ヘイ、ヘイ……そんなことじゃ、補欠だぞ！」

中の声は、そんなことを叫んでいる。

「あん？……」と三人は顔を見合わせた。

……こりゃ、どう聞いたって野球の練習。とするとここは？……

やっと三人は、あたりを見回す余裕が出てきた。

三人の後ろで、壁はすぐとぎれ、その向こうは、高いネットが続いている。

ネットの中は野球のグラウンドだ。

そして、そこで練習しているユニホームは、裕子が忘れもしない予選の決勝戦の対戦相手

——そう本大四高だった。

そのとき、由起子が裕子の腕をつっついた。

「あれ、あれ、シー……」
由起子は、人差し指を口に持っていって、黙ってと合図し、そのままその指で壁の向こうを指した。
平和のヤスが、校門の前で本大四高の生徒と会っている。
「シュート」裕子がささやく。
「まかせなさい」
由起子のサムライのズームが動く。
あっという間に連射の七十二枚――ハーフカメラは経済的だ。
その間に、本大四高生から金を受け取る平和のヤスの姿が、しっかりと写し込まれていた。
浩は、ただもうぼんやりつったっているだけだった。

＊

「少なくとも、平和のヤスと本大四高は関係があるわ」
裕子が野球部室で、みんなを見回していった。
浩が七十二枚の写真をトランプのように集めながら、
「だけど、この学生はいったい誰だったんだろう？」
「誰って……」由起子がつまる。
写真の学生は制服を着て、しかも学帽を深くかぶっている。判別がつかない。

「制服は画一的よねえ。きらい」と久美。
「やっぱり四百ミリ以上の大砲を持っていけばよかったんだわ」由起子が、くちびるを噛んだ。
そのときだった。
「そいつは、四高のエースピッチャーの藤石良次……。そして事件を仕組んだのは、奴をふくむレギュラーの四人よ」
「えっ？」とふりかえる一同の前にマキが立っていた。
「奴らは、どうしても甲子園に出たかったわけ。そこで、新宿の雀荘で知り合った平和のヤスに頼み込んだのだ。松濤高校の野球部に不祥事を起こしてくれってね。奴らは、帰りが一人のときが多い土屋君に狙いをつけたわ。で、目的を達したってわけ。でも、チンピラは一度つかんだお得意さんは逃がしゃしないわ。いまだに連中、それをネタにゆすられて、金を巻き上げられている自業自得の一幕よね」
「でも、マキ、どうしてそれを……」
目を丸くして裕子が聞いた。
「いくら相手がチンピラでもね。素人さんの娘さんにはヤバいわ。だから、あなたたちの後を、うちの若い衆が尾行したの」
「気づかなかった」裕子と由起子は呆然である。
「で、あなたたちが無事に帰ったのを見届けてから、平和のヤスにちょっと質問したってわけ。最近の若いのはヤワだわ。指の二本を、ちょいっと……」

「つめたの?」裕子のふるえた声に、一同は凍りついた。
「まさか。ほんのつき指……で、ペラペラしゃべったわ。あ、安心して、これはこっちの世界のこと、警察関係とは関わりなし。平和(ピンフ)のヤスも、このことをほかにしゃべるほど、ばかじゃないわ」
思わず由起子が溜め息をついた。
「プロの世界じゃ……」
「うちと同じね」肩をすくめて議員の孫娘の知保がつぶやいた。
「いろいろ教えてくださいね。そちらの世界のことも」
直美が、ニコリともせず、ファイロファックスにメモした。
「いずれにしろ!」
裕子は、椅子(いす)から立ち上がった。
「許せない!」
女子生徒達は頷いた。
そして、男子野球部員も、互いの顔を見合って肩をすくめた。
野球をやる気は、ほとんどなかった彼らも、今は少し違っていた。
……たかが野球校のくせになめやがって——。やせてもかれてもこっちゃ都立だぞ。よし、売られた喧嘩(けんか)は買ってやらあ……
そこには野球も甲子園もなかった。

たぶん、生まれたときから眠っていた乱暴、単純、身勝手な闘争本能なのかもしれなかった。
しかし、それすらが、ほんの前兆（オーメン）にすぎなかったのだ。

第二章　甲子園狂の歌

本大四高、許すまじ！……
とはいってみたものの、具体的にどうすればいいのか——。
いったん熱くなった頭も、浩がみんなのお金を集めて買ってきたローソンのシェイクで冷やしてみると、いい方法がなかなかみつからない。
代議士の孫娘、大山知保は、ポケットフラスクの中の液体をシェイクにふりかけながら気楽にこういった。
「いいつけちゃえ、いいつけちゃえ、高野連にも警察にもね。世の中、大騒ぎ、面白くなるわ」
そうとうのお祭り好きだ。
知保は、ストローでシェイクを一気に吸い込むと、
「でなければ、駆け引きするのよ」
「駆け引き？」
裕子が聞いた。

「うん、ここはゆずって、貸しを作っておくわけ。次の甲子園はいただきます。かけひき、かけひき、世の中、なんだってかけひきよう」

さすが政治家の孫娘ふうの発想である。

「だけど、かけひきしようにも、来年、そこまで松高は勝ちすすめるかなあ……」

浩はまたしても意識しないで水をさす。

「それに、かけひきなんかしたら、同じになっちゃいます」

蚊の鳴くような声で中志津がいった。

「それじゃあ、本大四高も松高も同じ穴のむじなになっちゃいます……。あ、ごめんなさい」

志津は、耳をまっ赤にしてうつむいた。

「いいのよ。中さんのいうとおりだわ……」

裕子が頷く。

「あのう……」

「えっ？」

志津は、小さな声で抗議した。

「どうして、わたしだけ中さんなんですか？　みんなは名前を呼び捨てなのに……」

「あ、あの……中さんはおとなしいから、呼び捨てにすると傷つくと思って……」

「さんづけのほうが傷つきます。わたし、あまり意見はいえないけど……、参加はしているつもりです……。あ……、ごめんなさい」

また、うつむいてしまった。
「ごめん、わたしが悪かったわ。今度から志津って呼ぶ……」
志津は、こっくりと頷いた。
裕子はちょっと困ったなって感じで、浩を見た。
浩は女の子たちを見ていると困る余裕もない。
まったく、女の子がこれだけ集まると、色とりどり、どう対処していいのか、さっぱり分からない。
一度に何人も恋人がいたというドン・ファンやカサノバはどういう性格をしていたのだろう。
それだけじゃない。
「英雄、色を好む」
世界の歴史に残るような人物は、恋人が何人もいたという。
浩が生まれる数年前に暗殺されたアメリカ大統領のケネディだって、マリリン・モンローがいたという噂(うわさ)だ。
……AV(アダルトビデオ)と間違えて、ビデオショップからレンタルしてきた「お熱いのがお好き」のマリリン・モンロー……、これがいいんだよなあ。それを恋人にしちゃうんだもんなあ……、大統領が……、ああ……、僕は所詮(しょせん)大物にはなれないなあ……
浩は果てしなくつまらないことを考えている自分に溜(た)め息(いき)をついた。
そして、けい子の声で、ふっと我に返った。

「自首させるっきゃないね」
けい子はみんなを見回して続けた。
「あとは、高野連におまかせさ。向こうが悪いと分かれば、こっちが出場させてもらえるさ」
「そうだよな。こっちには何の罪もないんだ」
昇が何度も頷いた。
「な、そうだろ！　みんな！」
そういわれれば、みんなそんな気がしてきた。
「ちぇっ、喧嘩はなしかよ！」
健がぼそっといった。
みんなに笑いが広がった。
なんとなく、沈没した甲子園がボコボコと浮上してくるような気がしたのだ。
「でも、いったい誰が説得に行くんだい？」
浩がみんなに聞く。
「下手なのが行くと喧嘩になって元も子もなくなるよ」
「わたしが行くよ。一人でね」
浩に、水をさすなといいたげにけい子が立ち上がった。
「わたしが種をまいたようなもんだもん。わたしが刈り取るわ」
ほかにいい意見も浮かびそうになかった。

「なんのいいがかりだよ」

＊

本大四高のエース・藤石は、四高の校門の前で待っていたけい子をふりはらうようにして歩きだした。
「どこに証拠があるんだよ。いんねんつける気かよ！　てめえらの不祥事をなすりつけようってのか！　知るか！　警察呼ぶぞ！」
立て続けにわめきながら、けい子には一言もいわせない。
……こんガキゃ、蹴倒してやろうか……。いいや……
けい子は気をとりなおした。
「いえいえ、待ちなよ、うさぎさん。ここは辛抱カメさんよ」
けい子はそんな呪文ともつかぬ台詞を口ずさみながら藤石を追った。
しかし、何をいおうとしても聞く耳を持たずに歩き続ける藤石だ。
何かをいえたとしても、俺は知らないとしらを切り続けるだろう。
仮に平和のヤスが証言しても、チンピラと甲子園出場選手のどっちを信じるのかと、警察や高野連に訴え続けるに違いない。
そのうち甲子園は終わり、彼らは卒業してしまう。
けい子は追うのを止めた。

そして、藤石の後ろ姿に叫んだ。
「あんた、三浦しようったってそうはいかないよ。これはロス疑惑じゃないんだ。あんたと平和のヤスが会っている写真がある。証拠はちゃんとあるんだよ！」
藤石の足がビクッと止まった。
振り返った。そして、
「いいかげんなこというなッ！」
そう叫ぶと走り去った。
けい子は、どうしたらいいか分からず、ショートカットの髪の毛をポリポリかくしかなかった。

＊

次の日の朝だった。
また、前夜、立ちのき問題で一戦あったのだろう、なんとなく険悪な静けさのただよう食卓で、裕子はテレビの朝のニュースをぼんやり見ながら朝食をとっていた。
だが、いきなり目の前に映しだされたニュースに、裕子は食べかけのべったら漬けをのどにつまらせかけた。
——昨夜十一時ごろ、渋谷区神宮前三丁目、藤石良助さん宅でガス爆発が起き、藤石良助さんの次男、良次君が全治一カ月の重傷を負いました。幸い良次君は命を取りとめましたが、

爆発は良次君の部屋で発生しており、どうやら良次君がガス自殺を図ったものと当局は見ています。良次君は、甲子園出場の決定した本大四高のエースで、その重責に耐えきれず、ノイローゼ気味だったと周囲の人々は語っています――

裕子はべったら漬けをお茶で胃に流し込み、ゲタをつっかけて松濤高校へ走った。

松高野球部と生徒会には重苦しい空気が流れていた。

落ち込みの激しいのは、けい子だった。

「あなたのせいじゃないわ」

みんながいくらなぐさめても、かぶりを振るばかりだった。

そしてその翌日、さっさと退学届けを学校に提出してしまったのだ。

届けを受け取った校長は、茶をすすりながら教頭にいった。

「ま、よかったんではないですか。この不祥事のおかげで、甲子園で無駄遣いをせずにすんだし、万が一、うちの選手が本大四高のようなことになれば、目もあてられません」

「そうですよ。都立高校に甲子園など無縁でいいのですよ」

一人の生徒が退学になって、都立松濤高校が甲子園の乱痴気(らんちき)騒ぎとは他人になれた。

だとしたら三田けい子の事件など安いものだったのかもしれない。

むしろありがたいぐらいだ。

校長も教頭も、ぽっと安堵(あんど)の溜め息をもらした。

そんなとき、一通の手紙が野球部に届いた。

差し出し人は、日赤病院藤石良次となっていた。

——都立松濤高校　野球部部長様　ならびに三田けい子様
　僕は、やっと今、話せるようになりました。ぜひ、病院に来ていただきたいのです。
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　藤石良次——

二人は病院に行くことにした。
当然のように浩もつきあわされた。
けい子は退学の身だし、生徒会側の証人が、裕子以外に必要だと思ったのだ。
三人は東急文化会館の花屋で、一万円の花束を買った。
費用は部費から出した。
部長の特権ではなく、みんなの意見だった。

*

藤石の病室は、五階の個室だった。
「なに？　これ……」
ドアを開け、中をのぞき込んだ裕子とけい子が、最初にもらした言葉がこれだった。
「ここは、フラワーショップか……？」
そうつぶやいたけい子に裕子がささやき返した。

「いや、……ギフトショップかも」
確かに、その部屋は二人の知っている病室という代物とはあまりに違っていた。
大小の花束や花カゴが、所狭しと置かれ、表参道のキディランドあたりで買ったらしいピーター・ラビットやロジャー・ラビット、そのほかモロモロのぬいぐるみや松濤の隣の神山町にあるゾナルトあたりでわざわざラッピングしてもらったのだろう……、東急本店やパルコあたりとは明らかに違う、カラフルでくせのある包装のプレゼントの箱が山積みにされていた。
おまけに、その真ん中に二十七インチのモニターテレビ、プロフィールがドンと置かれ、ファミコン、セガ、PCエンジンまでつながっている。
今、テレビに映っているのは、聖闘士(セイント)星矢の再々放送らしい。
「あ、来てくれたんだね」
花束の山をかきわけるようにして藤石が顔を出した。
花束のむこうにベッドがあり、藤石はそこに横たわっているのだ。
「ちょっと待って、モニター消すから……」
藤石はリモコンで、画面を消した。
テレビ台の中のビクターのS－VHSビデオは動いている。
「この回、撮り残していたんだ。ダビングすると画質が落ちるだろ。やっぱオン・エアを録画しなきゃね」
藤石の顔は血色もよく、ガス爆発で重傷と報道されたわりには、顔には傷一つない。心配し

ていたのがなんとなく馬鹿みたいだ。

……なんだ、元気なのか……

不謹慎なようだが、裕子は、なんだかがっかりしてしまった。

そして手に持った花束を何げなく後ろにかくした。

花がもったいないと思ったわけではない。

そこまで藤石に悪意を持ってはいない。

この病室にある花束のラッシュに、なんとなくプレッシャーを感じてしまったのだ。

……まいったな、ここに並んでいる花束、みんな少なくとも、一万百円以上はしそうだわ……

だが、けい子は、裕子の手から花束をもぎとるようにつかむと、藤石につきだした。

藤石の自殺未遂を聞いて、即座に退学届けを出したほどダメージを受けていたけい子は、藤石の元気そうな姿が、やたらとムカついたのだ。

「これお見舞い……。うちの……いえ、わたしが昔いた松濤高校の野球部からよ」

「あ、ども……、そうだな……、そのソファの上にでも置いといて」

藤石はチラリと見ただけで、

ソファの上も花束でいっぱいだ。

「あとで、まとめて大きな花瓶に入れてもらうから……」

「まとめてね……、そう」

けい子はソファに花束を放り投げるように置いた。
ほかの花束にまぎれて、どれがどれだか分からなくなった。
「なるほどね、花屋さんを始めたんだ？　五階の患者さんにお見舞いの花でも売るつもり？」
けそっと皮肉をいうのはけい子の得意技だ。
「それは五階の誤解だよ……」
けい子と裕子はげんなりだ。
「あは……、これ、ジョーク、ジョークね」
くったくのない藤石の顔に、けい子も裕子も、白け鳥（スワン）になって窓から飛んでいきたかった。
「ここにあるのはね、ファンの見舞い……。ほらグルーピーってやつ、いるだろ」
「あっ、そ、今度、入院するときは、ビッグエッグか武道館にするといいわね」
けい子の皮肉に気づく様子もなく、藤石は悲しそうに頷いた。
「うん、そうだね。ビッグエッグねえ。あそこで野球ができたら最高だよね」
けい子の皮肉はとどまることを知らない。
「あそこ、外と中との気圧の差で、頭が痛くなる人もいるんですってね。わたしも、なんとなく、今がそんな気分」
「空気が悪いのかなあ……。窓を開けてもいいよ」
「うん、頭がにぶくなっちゃうもんね、ここの空気は」
けい子は窓辺に行った。

広尾の屋敷町を見降ろせる見晴らしのよい部屋だ。
「高いんだ、この部屋……」
「一日の差額がうん万円だってさ。でも、カンパはいらない」
……誰がカンパするか、差額ベッドなんかに……
裕子もけい子も浩も、同時にそう思った。
藤石は話し続けた。
「学校が面倒みてくれるんだ。なにしろ、俺、エースだろ、野球部の……」
藤石は胸を張った。
どうやら、本大四高の野球部は特別優遇されているらしい。
けい子は大袈裟に叫んだ。
「すごい！　あなたは四高の、なんてったって客寄せ球児だもんねえ。パンダより大事にされてるのねえ！　はい、いらはい、いらはい。プロ野球予備校の本大四高です。藤石さんのようになりたい方は、ぜひどうぞ。おっと寄付金はフォーゲットミーノットの忘れな草……。質草はお断り」
……こりゃいいすぎだわ……
さりげなく裕子はけい子にささやく。
「カフェインはおさえめに……。わたしたち、一応、見舞い客なのよ……」
けい子はポリポリと小指で髪の毛をかいて、

「オンリー・ルック・ダンシング……。そうね、踊らずに見るだけにするわ」
けい子は、藤石に向き直って見すえた。
「で、話って何なの？」
「ん……、うん」
藤石は下を向いた。
黙ってそのまま動かない。
「？……」
裕子とけい子は顔を見合わせた。
「あのう、なんなんですか？　話って……藤石さん」
裕子が聞いた。
相変わらず黙っている。
裕子とけい子は肩をすくめた。
そのときだった。
「ウ……、ウ……、ウ……」
藤石の肩がふるえだした。
「えっ？」
二人は藤石を見つめ直した。
藤石のほおを、ぼろぼろ涙が伝わり落ちていく。

「ちょっと……あの？」
　裕子は、あわててけい子に、
「やばいわ。けい子がいいすぎるからよ。仮にも相手はけが人よ。感じやすいのよ。それに……、あっ……」
　裕子は青ざめた。
「やだ、この人、自殺未遂じゃない」
　けい子もうろたえ、裕子のえり首をつかんで引きよせた。
「ちょいと、そんなこと大声だすなよ。いまさら思い出させちゃやばいよ。あれってくせになるからね。今度やるときに助かるとは限んないんだからね」
　藤石がうらめしそうに二人を見た。
「それもいいすぎだよう……」
　血走った目に死相を見る思いだ。
「わっ！」
　二人は悲鳴をあげた。
　と、同時に、サイドボードの果物ナイフが目に入り、
「わ――っ！　わ――っ！　わ――っ！」
　二人は三度叫んで、果物ナイフに飛びついた。
「わたしが預かる」

「いえ、わたしが」
思わず、取り合いになった。
そんな二人を涙でぐちゃぐちゃの顔で、けれどポカンと見ていた藤石が、
「ごめんなさい」
やけに素直な声だ。
「えっ？」
二人は藤石を見つめ返した。
すばやくけい子がナイフをジーンズのベルトにさし込んだ。
「ごめんなさ〜い！」
藤石は、ベッドの上にポンと正座すると、頭をぺったりと下げた。
なにやら、やたらに機敏だった。
……ほんとにこれが重傷か……
もっとも、マスコミの軽傷、重傷は、なにを基準に決めているのか裕子は知らなかった。
……中傷記事なら、よく分かるけれど……
裕子がそんなことを考えている時間分、たっぷり、藤石は頭を下げたままだった。
とうとうたまらず、裕子は、けい子にささやいた。
「ねえ、……どうしちゃったの？　この人」
「わしゃ……知らん……、けどたぶんね……。いわゆるショックでさ……、ガス爆発の……」

けい子が、ここがおかしくなったんじゃないの？……とでもいいたげに、自分の頭をつつく。
「そか……」
裕子はさりげなく、けい子が開けかけていた窓の鍵をしめた。
ここは五階だ。着地するなら、四十六階の京王プラザホテルもここも、結果は同じ……、棒高跳びでも着地できる高さではない。
「ごめんなさい……、許してください」
やっと藤石が、鼻をぐしゅぐしゅ鳴らしながら口を開いた。
二人は男の涙をこれほど近くで見たことはなかった。
「まあ、涙を拭きなよ」
けい子がダックスの茶色い格子縞ふうのハンケチを出した。
けい子は、アンダーウェア以外は、男物愛用だ。そんな中でも、ハンケチだけは、ちょっと贅沢をしていた。
藤石は無雑作にハンケチを受け取り、
「グチャン！」
いきなり鼻をかんだ。
「あ……、あ……」
けい子はすくんで悲鳴を飲み込んだ。
……二度とハンケチを人に貸すもんか……。ハンケチだけはドケチになるぞ……

藤石は、糸をひくハンケチを目の前の裕子に戻した。
「あ……、これ……」
ハンケチをつまんでけい子に渡そうとする裕子に、
「あげます……、それ」
「だって、これ男物……」
そういいかけた裕子から、
「すいません……」
藤石がハンケチを取り、もう一度鼻をかんだ。
グジャッ!!
「ありがとう……」
ハンケチを戻そうとする藤石に、二人は同時に叫んだ。
「いらない、ない、ない!」
「そう……」
藤石は、ハンケチをゴミかごにポイと捨てた。
「このう!」
思わずけい子の握りこぶしがわなわなとふるえた。
「お願いだよッ!」
藤石は鼻をかんだ手でいきなりけい子の手を握った。

「あ、あ……、あのッ……、ハンケチはもうないわ」
「ハンケチならあるよ」
藤石は、見舞いの包みの一つを無雑作に破った。
ハンケチの箱からピエール・カルダンだと分かった。
藤石は鼻のまわりをハンケチでぬぐうと、ゴミかごへポイッと捨てた。
けい子は、ダックスとピエール・カルダンのために、この男をぶん殴ってやろうかと、握りこぶしの骨を鳴らした。
あわてて裕子が、ブリザードの吹き荒れるけい子の気分をやわらげるように藤石に聞いた。
「あの、あなたのお願いって？」
「俺の自殺の原因はあれなんです」
藤石はいきなり核心に入ってきた。
こうなれば、裕子もけい子も居住まいを正す。
「あれって……」
裕子には、もちろん分かっていた。
分かっていても聞いてみるしかなかった。
「命を賭けても守りたかったんです。俺たちの甲子園を……」
けい子は、予想どおりの答えに、溜め息をついた。
「やっぱね。でも馬鹿だよ……、ひどいよ……、たかが野球でさ……。わたしが死にたくなっ

ちゃったよ」
　やりきれない気分で、けい子がせつなく呟いた。
「すいません。でも俺たちにはたかが野球じゃすまないんだ。俺たちにとっては、野球が全てなんだ……、うん」
　藤石には、自分にいいきかせるように頷いた。
「俺たちの一生が甲子園にかかっているんだ……、うん！……うん！」
　何度も頷く。
「やだなあ、そういうのって……」
　けい子は首を振りながらソファの花束を隅によせて坐った。
　そして、大きな溜め息をついた。
「オーバーだわ。一生だなんて」
「オーバーじゃない！」
　いきなり、藤石が怒鳴った。
　ほとんど人が変わったように目がギラついている。
「おっと！」
　二人は思わず身構えた。
　藤石はまくしたてた。
「俺たちは、あの桑田を、あの清原を目指して生きてきたんだ。そのためには、まず甲子園、

それっきゃない。甲子園に行けば、プロの道が見えてくる。プロになれなくても、就職のときに、甲子園は有利に評価される。全て全て、甲子園が第一歩なんだ。甲子園がなければ、俺たちは、ただの野球馬鹿の落ちこぼれだッ！」
藤石は立ち上がった。
「俺が野球ができなきゃ……、甲子園の候補でなきゃ……」
藤石は、けい子の横の花束をごっそりかかえた。
「こんな花も！」
藤石は、花束を床に叩きつけた。
花びらが散った。
「こんな贈り物も！」
プレゼントの山を蹴り飛ばした。
ぬいぐるみを病室のドアに投げつけた。
「全部、みんな、ほとんど、全て、無意味だ！　俺たちは、甲子園がなくては、人生の敗北者だあ！」
涙がぼろぼろ藤石のほおを流れ落ちた。
裕子とけい子は相変わらず、ポカンと口を開けっぱなしだ。
ともかく大迫力というか、大熱演というか……。
裕子は、なんとなく、今、授業でやっている英語の副読本を思いだした。

シェークスピアの悲劇――。
……ああ！　生きるべきか、死ぬべきか、それが甲子園だ……。ああ甲子園、甲子園、どうしてあなたは甲子園なの？……
藤石は、ベチャッと裕子の前にひれ伏した。
「お願いだよ、俺の自殺をあわれと思うなら、あのことは黙っていてくれよ。俺だけじゃないよ。ほかのチームメートの運命も……」
「『ジャジャジャジャーン』か」
けい子が、小さく、ベートーベンの「運命」が扉を叩くフレーズを口ずさんだ。
ジロリと藤石はけい子を見た。
「おっと！」
思わず身構えるけい子に、藤石は何度も頷いた。
「そう、それだよ。ジャジャジャジャーンだよ。運命だよ。そしてそれは俺たちの人生なんだよ。俺たちの明日が、ブラックホールに吸い込まれちゃうんだ。ああ！　どうなってしまうんだ、俺たちは……！」
藤石は頭をかきむしった。
かきむしったところで、本大四高の野球部は五分刈りだ。髪の乱れる心配はなさそうだ。
ただ、スローモーションのように、ふんわりとフケが飛んだ。
「風呂に入ったほうがいいわ」

思わずけい子が忠告した。
「ガス爆発で死にかけたんだ。風呂になんか入ってられるか」
「ごめん」
けい子はすみやかに、かつ、素直にあやまった。
「あやまっているのは俺だよ。君たちの出方によっては、人生の落伍者が、渋谷の場外馬券売場に少なくともチームレギュラー九人分ふえることになるよ」
藤石はサイドボードの引き出しを開けた。
中から十数枚の紙っぺらを取りだし、引きちぎった。
「こんなものが当たるわけないんだ！」
馬券だった。
そういえば、日赤病院から、渋谷の場外馬券売場までは、そう遠くない。
「地獄だよ……、甲子園に行けなかったら。俺たちは生きて地獄をさまようんだッ！」
「けれど、本大四高は、本大十高ほど本命じゃなかったでしょ。そこまで思いつめることないでしょうに……」
裕子は藤石を傷つけないように、できるだけやさしさを装っていった。
「そうさ、いつもトップは本大十高だった。いつも四高はパート2だった。でも今年は違った。ざまあみさらせ！」
いきなり、こぶしを握ってわめく。

「やつら、酒飲んで、自爆沈没、出場辞退……。いよいよ俺たちが陽の目を見る日が来たんだ」

　藤石は、くるりと裕子たちにふりむいた。

「俺たちに希望の光がさしてきた。甲子園にいける。プロになれるかもしれない。今までは当然のように予想されていた、下積み人生から脱出できる……、このラッキー運に、俺たちはうちふるえたよ。学校だって大喜びさ。プロの各球団のスカウトに、レギュラーの資料をダイレクトメールで送ったりもしたさ。けど……、俺たちの前にとんでもないのが現れた。……チェッ。都立高だとさ……。決勝に出るはずのない都立高が、のこのこ所場（しょば）を荒らしに出てきやがった。くそッ！　あの野球音痴（おんち）どもめッ！　くそッ！　てめえらは机の前で昼寝していりゃいいんだ！　くそッ！」

　藤石は吐き捨て続けた。

「あのう……、あなたの話しているわたしたちが、その都立高校の生徒だってこと、お忘れなく」

「忘れちゃいない。ただ、松高なんかに、俺たちが負けるはずがないってことさ。ところが、ところがだよ。ああ、天は血も涙もないのか？　天は我を見放したあ」

　藤石は両手を天井にかざし、ひざまずいた。

　まるで、ベトナム戦争映画「プラトーン」のポスターだ。

「負けるなんて……、俺たちが都立高に負けるなんて……、絶望だよ。実力のある本大十高な

らまだましだった。けど、都立なんかに負けるチームにプロのスカウトは見向きもしないよ」
……ご愁傷さまというよりない……。しかし、この男、これほどオーバーだと、ちっとも
ピティがわいてこない……
「こうなったら、なんとしてでも甲子園に出て実力を見せなきゃならない……。俺たちは真剣
に悩んだんだ。甲子園に行けずに、人間やめますか？　それとも、行って、まともな人生を送
りますか？　って……」
……それをいうなら、甲子園に行って人間やめますか？　でしょうが……
と裕子は思ったが、藤石を興奮させたくない……、口に出すのはやめた。
「そして、やっと出場が決まったら、君たちに写真をとられちまった。俺の不注意で、出場辞
退になったら、ほかのやつらも自殺するかもしれないよ」
「気持ちは分かるような気がするわ。でも、なんか不純……」
裕子は肩をすくめた。
「不純？」
藤石の目がギラリと光った。
「不純なのは君たちじゃないか……いいか？　俺たちは真剣なんだ。けど、君らにとって野球
はなんなんだい？　君らはいい大学行って、どっかの会社に入る受験校だ。野球なんて遊びじ
ゃないか。誰もプロになろうなんて思っちゃいない。でも俺たちは違う。人生賭けて野球やっ
ている。純粋に野球やっている。そんな神聖な場所に、遊びで割り込んで来て、恥ずかしくな

いのかい？　遊びなんかで、命がけで野球やっている人間の人生を狂わしてそれでも平気でいられるのかい？　俺は、そんな遊び半分のやつらは許せない！……でも……でも……」
藤石は、ガックリと膝をついた。
「……今は、頭を下げる……。悲しいけれど、せつないけれど頭を下げる。俺たちの生きる道を邪魔しないでくれ」
またまた頭を床にこすりつけてしまった。
裕子もけい子も困ってしまう。
なんだかこれではほとんどこちらが加害者気分だ。
「でもね……」
裕子は、自分でも驚くほどの猫なで声をつくった。
「仮に私たちが黙っていたって、藤石さんのケガは、もう甲子園には間にあわないんでしょう？」
「うん……」
ポタリと涙が床に落ちる。
「そうまでして、チームの甲子園行きを守りたかったの？」
「守るもなにも……、写真が発表されたら、俺はもう終わりさ。プロだって暴力団となにかあれば永久追放だろ。カケ麻雀で西武の東尾なんか半年近く謹慎処分だよ。ましてさ、高校生の俺だよ。一生、ブラックリストさ。野球の世界の前科者だよ。……死んだほうがましさ……」

「死んだら野球……、草野球もキャッチボールもできないのよ」
「球投げしても生活はできないさ……、でもね……」
藤石は、ふっと頭を上げた。
「でも？」
「君たちが黙っていてくれたら、もう二度と死なずにすむかもしれない」
ニッと笑う。
涙でぐちゃぐちゃの笑顔は、どこか不気味だ。
……病人を相手にしてもしゃあないな……
けい子は立ち上がった。
「野球を大事にね……」
なんとなくけい子は甲子園なんかどうでもよくなってきた。
退学だけが、しゃくの種だが、ま、どうせ大学に行く気はないのだし、一人で生きる準備のために、少し早めに卒業したと思えば腹も立たずにすむ。履歴書が問題になるような仕事につく気もない。もともと、戸籍謄本の父親の欄は空白のけい子だ。それに比べれば、高校中退なんて、ハンディ三十六で回っているゴルフで、ボギーを一つ叩いたぐらいのものだ。
余談だが、けい子はどこで憶えたのかゴルフはシングルの腕前だった。
藤石は、けい子の気持ちが読めたのか、突然、表情を明るくした。
「ああ、俺は野球を続けるよ。少し遠回りになったけど、本大に行って野球部に入るんだ。そ

こで頑張れば、傷心のエース、復活。宣伝効果、抜群だよな。スカウトが放っておくわけがない。それにさあ、高校より大学のほうが契約金がいいしね」
ぷっつん!!
裕子とけい子の時間が止まった。
どうやら藤石は調子に乗りすぎたようだ。
「そう……そういうこと……」
けい子は、きりっと黒猫の目で藤石を見すえた。
「あんた、チェルノブイリに放り込まれても死なないタイプだね」
「あん?」
「ガスで死ぬなら、よく戸閉まりをしな。手首を切るなら、血管は横ではなく縦にお切り。でなきゃ、死にきれない。何度でも生きかえるよ、あんたは……」
裕子もけい子と同じ気持ちだ。
「飛び降りるなら下に気をつけて。まきぞえはごめんですからね。水の中は、おもりを忘れずに……」
藤石はポカンと口を開けた。
裕子はニッコリ笑った。
「いずれにしろ、私たちだけでは何の答えもだせないわ。あの事件を黙っているかいないかは、もうしばらくお楽しみにね……」

「いいつけたら死ぬぞ……」

藤石が表情のない目で答えた。

裕子は、床にちらばった花束の一つを拾った。二人が持ってきた花束だ。

「そのときはこれを飾ってね……お見舞いじゃなくて、松高野球部からの香典代わりにね……」

裕子はポンとベッドの上に花束を投げると、けい子に、

「あれ？　ここ何科の病棟だっけ？」

「えっ？　精神科じゃない？」

「わたしも……、そう思うわ」

二人はニッコリ笑って、病室のドアを開けた。

「あ、ごめん、忘れてたわ」

けい子がジーンズのポケットに手をやり、何かを投げた。

ベッドのサイドボードに、果物ナイフがつきたっていた。

二人が出ていったドアをぼんやり見つめながら、藤石はぶつぶつと呟いた。

「いいつけるもんか……、あいつらにそんな度胸はないさ……。第一、甲子園は俺たちがいくべきなんだ。それが正しいんだ。いいつけられてたまるか……」

それから急に涙が吹き出してきて、ベッドにもぐり込んで泣いた。

その泣き声は嘘ではなさそうだと浩は思った。

浩は、先刻から黙ってドアの傍で裕子たちと藤石のやりとりを見つめていたのだ。
「あん？」
ベッドのシーツの中で、藤石の声がした。
シーツから藤石の顔が出てきた。
浩に向かってきょとんとした顔でいった。
「あんた、誰？」
「え、あ、僕、松高の……」
いいきらないうちに、藤石が花束を投げつけて叫んだ。
「出てけ！　出てけっ！」
どうやら、浩の存在に気づいていなかったらしい。
……僕って、そんなに目立たない存在かなあ……
浩は病室を出ながら、そうとう情けない気分だった。

第三章

怒りを高野に！

裕子は怒っていた。

甲子園はプロのマイナーリーグじゃないんだぞ。

甲子園が就職斡旋グラウンドであろうと、都立高校生の遊びのグラウンドであろうと、決勝で勝った以上、出場の権利はあるはずだ。

妙な同情に流されて、権利を捨てるほうが不純だ。

本大四高がプロを目指すなら、遊びのチームに負けるほうが悪いのだ。

本大四高が一生の仕事として野球に夢中なら、私たちは遊びとしての野球に夢中だ。

同じ高校生が夢中になることに差があってたまるものか。

「私たちは意地でも甲子園に出場すべきです」

野球部室で、裕子は熱っぽくまくしたてた。

野球部員も応援部員も頷いた。

だいたい、何ごとであれ、妨害されると反発が自動的にセッティングされる年ごろだ。

「藤石って子、こんなことで死ぬんじゃ、ほかに何やったって死んじゃうんじゃない？　ドス

やチャカで殺されない限り、自分から死ぬ人は、そいつが弱いのよ」
　というマキの意見は過激としても、
「そう、他人の弱さに、こっちがひきずられることないわよ」
　某リクルート事件で、罪の意識を感じすぎた秘書に自殺された代議士の孫娘、知保は割り切っている。
「要するにこれ、逆手の脅迫よね」
　直美が、ファイロファックスにメモしながら呟く。
「普通は、いうこときかなきゃ殺してやる……、今回は死んでやるですもの……。でも脅迫は脅迫。立派な犯罪じゃないかなあ……。どうするの？　わたしたち、脅迫されますか……」
　研究発表のような感情を見せない直美の声は、それだけにかえってみんなを刺激した。
「そうよ、これは脅迫なんだわ。わたし、負けない。負けたくない」
　裕子がきっぱりといいきる。
「今回のは、お金じゃ解決つきそうにないしね。死にたいんだったら死んでもらうしかないんじゃない」
　知保がケロリとそういった。
　そんな女子のやりとりを、浩は口を半開きにして聞いていた。
　理屈は分かるのだが、なんだか、やっぱり女の子の思考回路は恐ろしげなものがある。
……藤石君、彼女たちの情にすがった君は甘いよ。女を知らない男の甘さだよなあ……、

きっと……
「やつは死なないわ」
部室のドアの前によりかかっていたけい子がいった。
「あいつは、自分に未練がたっぷりだもの、そんな男は死なない……。あの自殺だって本気かどうか分かったもんじゃないわ」
「まあな」
いまや松濤のエース、健が頷いた。
「ピッチャーってやつはいつでも自分中心だ。人のためには死にゃしない。打たれても打たれても、悪いのは自分以外の誰かだ」
「じゃあ、速見さんも、人のためには死なないのね」
由起子がなにげなく聞いた。
「自分からはマウンドを降りない。ピッチャーが死ねるのは……」
健は、裕子を見つめた。
「好きな女のためだけさ」
ウインクした。
「いう〜ッ」
応援部の女子からほとんど呆れかえった溜め息がもれ、野球部の数人が椅子からとけ落ちた。
裕子はせき込みながら、浩にささやいた。

「行こう」
「どこへ？」
「高野連……。ダイレクトアプローチ！」

＊

で……、翌日の午後、裕子と浩は東京・高野連の応援室にいた。
東京・高野連は、運よく、渋谷の渋谷女子高のそばにある。
一時間近く待たされて、二人の前に現れた担当責任者は、若い男だった。
責任者は、つまようじで耳をほじくりながら、ニラレバいためのニラがひっかかった歯をむきだして話し始めた。
「え〜ッ、松濤高校の出場辞退はだね。別に高野連が決めたのではなく、松濤高校の自主的な決定なわけだからねェ……、われわれにいわれてもねえ……」
裕子が持っていった資料をパラパラとめくり、
「一応、検討はしますけれどねえ……。ところで、ここに来るのは、学校の許可を取っているわけ？」
二人は黙秘するしかない。
学校の許可なんて、まるで無視していた。
だいたい、ガッコのセンセほど、あてにならないサラリーマンはない……、と裕子も浩も思

っている。

いや、それは二人だけでなく、今の小学生、中学生、高校生にとっては常識だった。センセは、給料が保障され、休みが多い気楽な職業の一種にすぎない。頼りにするほうが馬鹿なのだ。

もちろん例外のセンセもいるに違いないが、それを捜すほど、今の生徒たちは暇でも、やさしくも、甘くもなかった。

だから、学校の許可など、気にもかけなかった。

黙っている二人に、担当責任者は続けた。

「あのね、高野連ってね、高校野球連合ってことでね」

「分かってます」

「要するにね、高校を相手にしているわけ」

「私たち、松濤高校の生徒です」

裕子は学生手帳を出した。

「疑ってはいませんよ。ただ、生徒じゃなくて高校としてじゃなきゃ、相手できないわけ。筋を通してきてくださいね」

責任者は立ち上がった。

会ってから十分も経っていなかった。

まるで聞く耳を持っていなかった。

「あの人、たぶん責任者でもなんでもないんだわ」
裕子は、くちびるを噛みしめた。
「ああ、たぶんね」
浩が頷く。
役所や高野連のような大きな組織や会社には、陳情や苦情を訴えてくる一般の人が数しれない。
いちいち担当者がつきあっていては、本来の仕事に支障をきたす。
そのために、ペコペコあやまり、適当にお茶を濁してお引き取りいただく役職が必ずあるものなのだ。
浩にはよく分かっていた。
なにしろ、浩の父が平社員のころ、ニラレバを食べたかどうかは知らないが、長らくその役目をしていたのだ。
浩の父がそんな客に応対した日はすぐ分かる。家に帰ってから荒れること荒れること、遂には夫婦喧嘩にまで波及して、
「でえーい！」
テーブルはひっくり返すわ、茶碗は割れるわ、コップははじけるわ、酒瓶はころがるわ……。
とにかく嵐が去るまで、浩はベッドの中で息を潜めて潜水艦をしているよりなかった。
「よっしゃ！」

いきなり裕子が浩の肩を叩いた。
「えっ？」
「ね、しようがないガッコさんだけど、掛け合ってみようよ」
裕子は、まだまだめげていないようだ。
めげない裕子に、浩はいささかのめげ気分で聞いた。
「あてにしているわけ？　ガッコさんを……」
「ないない、してない。けど、やれることはやんなきゃ。わたしね、わたしたちのやる気だけはあてにしてるの」
裕子は、スカッと笑顔を見せた。
空は夕暮れだ。
高層ビルの谷間に夕陽が沈んでいく。
裕子は夕陽を持ち上げるように、両手をあげて大きく伸びをした。
「やっちゃうもん！」

＊

「なんということをしてくれたんです！」
ショートピースを吸う校長の指先がわなわな……。灰がポロポロ……、銀座の三越でローンで仕立てた背広上下のズボンの上に落ちていく。

ローンが終わるまでは——要するに元を取るまでは——糸くず一本ついていても、ピンセットでつまむし、トイレはしわになるからと、わざわざズボンをハンガーにかけてからしゃがみ込むなど、金のかかった買物にはやたら神経過敏な校長が、今日はズボンにこげ目がついても一向にかまわない様子だ。

そもそも裕子が学校側と掛け合うのに手間はかからなかった。

高野連が校長に連絡し、裕子と浩は、翌日の放課後、さっそく校長室に呼び出されたのだ。

「いかん！　まことに遺憾です。高校生が、こともあろうに高野連に殴り込んで、異議を唱えるなど、日本高校史上、あってはならんことだ」

校長室に入って来るなり、頭ごなしにわめかれては、裕子も黙っていない。

「異議じゃありません。殴り込んでもいません。チャカもドスも持っていませんでした」

「チャカにドス!?」

思わず、校長は後ずさった。

……あれ？　本職のマキの調子がうつっちゃったかな……。

裕子は、あわてて訂正した。

「あの、ピストルや刀のことです」

「そんなことは知っています。昔、渋谷東映には、よく通いましたからな」

「へえ……、それ、もしかしたら健さんや藤純子や鶴ちゃんのころですか？」

鶴ちゃんといっても片岡鶴太郎ではなく、鶴田浩二……、やくざ映画全盛の時代だ。

「ばかな！　わたしは、そんな歳じゃない。わたしは菅原文太の時代です！」
……よくいうよ。本当はこの校長、東映なら中村錦之助や大川橋蔵の時代劇の年ごろのはずだ……。そうとうにミエを張っているな……
浩はそう思った。
だが、こんなことで裕子へ腹を立てられてはたまらない。
浩はおどおどと、
「あのう……、僕らは、ただ本当のことを高野連に知ってもらって、本当は資格のある僕ら松濤高校を、甲子園に出してもらいたかったんです」
校長は、力まかせにショートピースを灰皿にこすりつけた。
「誰が高野連に行けといいました？」
「はあ？」裕子と浩は顔を見合わせた。
「誰の許しで行ったんです。誰もそんなことは許可しちゃおりませんぞ」
「待ってください。甲子園は、高校生による、高校生のための、高校生の野球のはずです。高校生の問題に、なぜ大人の許しを得なきゃならないんです？」
裕子は、校長のデスクに両手をついて身を乗りだした。
校長はいささかたじろいだが、気をとりなおして逆襲する。
「なんですか、その態度は……。今の台詞は、アメリカのリンカーンの演説のパロディのつもりでしょうが、いいですか？　あの演説は、アメリカの成人した民衆に対してのものです。君

たちは大人ですか？　とんでもない。まだ、われわれによる教育が必要な子供なんです。よく考えなさい。高校野球は、教育の一環です。われわれ教師の指導によっておこなわれるべきものです。君たちのやった指導なき密告は、無分別で、恥ずべき暴走です。いいですか？　われわれは、君たちの責任者、管理者として、甲子園辞退を選びました。それは正しい選択でした。松濤高校潔しとマスコミの讃辞を浴びました」

「テレビや週刊誌では批判している人もいます」すかさず裕子がかみつく。

「そんなものは目立ちたがり屋の与太者です。なんでも反対すればいいと思っている。どうせ、君たちに対する責任がありませんからな。しかし、われわれは諸君を教育する立場にいる。理由が何であれ、三田けい子の事件は不祥事です。われわれは責任をとらなければなりません」

「われわれって誰です。私たちですか？　先生たちですか？」

裕子は食い下がったらすっぽんだ。いいたいことがなくなってすっぽんぽんになるまで止まらない。

「松濤高校の全てです。不祥事はつぐなう……それがわが校で教育する者、される者の社会に対する責任です」

自分をお偉いさんだと思っている人間は、建て前をいうとき胸を張る。

校長も、まさにその一人だ。

と、校長の口調が、急にやさしくなった。

「もちろん、諸君がかわいそうだという同情の投書はたくさん届いています。投書は、学校だ

けではありませんよ。各新聞社、雑誌社、NHK、ありとあらゆるマスコミにはげましの便りが殺到しています。それはそれで、ほんとうにありがたいことです。喜ばしいことです。わが校の名は、甲子園を辞退したという潔癖さゆえに、日本中に轟（とどろ）いたのです」

　校長の独演会は続く。

「もしかしたら、最近、低迷していたわが松濤高校は、復活するかもしれませんぞ」

「復活？」

　裕子が聞きかえした。

「そうです。清潔な教育方針……、都会の真ん中にありながら落ち着いた環境……、しかもそれなりの学力を持ちながら、多額の教育費を必要としない都立高校……。それが証拠に、来年度の越境入学の問い合わせは引きもきりません。きっと優秀な生徒が集まってきますぞ」

　まるで、今の生徒はどうしようもないといわれているようだ。

……ま、それについては違うといいきれないけれどね……

　浩は苦笑した。

　と、いきなり、校長の声のボルテージが上がった。

「ところが、君たちがやったことはなんなのです!?　恥を知りなさい。恥を！」

……ははあ……。アメとムチというやつだ……

　でも、どんなにその二つを使い分けても、聞いている二人が最初から白けていては、甘くも辛くも、まるで感じやしない。

だが、この校長に、そんな生徒の気持ちが分かるはずがない。

「われわれ松濤高校の教育者の管理能力に泥をぬったとは思いませんか？　それは、松濤高校そのものに泥をぬることです。君たちは自分で自分を汚しているのですよ。しかも相手はスポーツによる高校教育の最高権威、高野連です。君たちにとっては何げない軽率さでやったことでしょうが、これは日本の高校教育への反乱なのですよ」

……なによそれ……。オーバーな……、冬でもないのにね……。いいえ、確かに冬かも……浮かびかけたくじらが、水面までいったら氷がはっていて出られなかった。そんな感じだ。人間たちは、くじらを助けても私たちは助けてくれないの？

裕子は、気持ちだけうなだれた。

そんな裕子の様子に、校長は、みるからに情けなさそうな表情を作り、悲痛このうえない声で、

「残念です。無念です。わたしはね、君たちに六〇年安保や七〇年安保の無軌道な学生たちを見る思いですよ」

……このオッサンも安保か……

裕子と浩はうんざりだ。

校長の年ごろから裕子や浩の両親の年ごろにかけては、安保に挫折に団塊に……。

良きにつけ悪しきにつけ、酒でも呑めば、やたらなつかしがってそれが出てくる。

だけれど、彼らの歴史を裕子も浩も知りはしない。

日本史なんて、授業が一年間……、はじめの卑弥呼さんから昭和まで到着しない。せいぜい明治の途中の中国いじめまでだ。
裕子はあっけんからんと校長にいった。
「安保なんて知りません。生まれてませんもん……。それに新入生が来れば、三年の私たちは卒業……、これからの松高がどうなるのか、それも知りません。大切なのは今の私たちです」
「黙りなさい！」
校長が一喝した
「君たちは、自分だけがよければいいのか？　後輩が、君たちのために肩身の狭い思いをしてもいいのか？　君たちは、高校を愛していないのか？」
さすがの裕子も、くたびれた。以下、口でいうのはだるいから、胸の中で思うだけにした。
……だめだ、こりゃ……。なにが母校愛よ。セーフになるはずの甲子園をアウトジャッジした学校を、どう愛せというのよ……。この学校には何もないわ……。何もないから、たった一つだけ、甲子園という思い出を作ろうとしたのに……。ねえ、校長さん……、ご存じですか？この高校で校歌を三番まで歌える人なんて一人もいないの。卒業式と入学式の前日に一時間だけしか練習しない歌ですもんね。先生のほうも教える気はないわよね。だって、入試に絶対、出るはずないもんね、こっちだって憶える気ないもん。それをさ……、私たち、今回は憶えようとしていたの……、ねえ、甲子園で一試合でも勝ったら、校歌が流れますよね。そのとき、テレビにどアップになった私たちが、校歌を口ずさんでたとしたら、けっこう感動できますよ

ね、私たちは、それをパフォーマンスするつもりだったわ。そんなこんなを当の松高にチャラにされて……。どうして、こんな松高を愛せます?……

裕子は親のかたきに会ったような目で、校長を見た。そして、ぼそりと……、

「昔、東京でオリンピックがあったそうですね」

「あん?」

校長はキョトンと裕子を見た。

……甲子園の話がいつからオリンピックになったんだ?……

「校長は古い話がお好きのようですから……」

裕子は、窓の外を見つめながら続けた。

「オリンピック前の年、わたしのママは小学校六年生でした。そして、オリンピックの開会式に小学生の鼓笛隊が出ることになったんです。どこの小学校を選ぶか、お偉方がテストをすることになりました。ママたち六年生は、一カ月以上前からほかの授業をつぶしたり、放課後に残されたりして、練習をさせられました。そして当日は、朝の八時から昼の三時まで、お偉いさんのテストを受けました。

空から見た様子が知りたいためにヘリコプターまで飛んできたそうです。

暑い日でした。おまけにその小学校の校庭はアスファルトでできていました。先生たちはわめきました。

『アジアで最初のオリンピックに、わが校が出場できるかどうかは、君たちのがんばりにかか

っているんだ！』
暑さと疲労で、何人も生徒が倒れたそうです。ママも貧血で倒れました。医務室に運ばれていくとき体育の先生のぼやきが聞こえたそうです。全く、都会の子はひよわでいかん。全くだらしない。情けないガキどもだ……。それでも練習のかいがあったのか、小学校の誰かさんが裏で手を回したのか、その小学校は、オリンピックに出場できました。ただし、ママたち、六年生は駄目でした。だって、次の年のオリンピックには、ママたちは卒業して、もう、その小学校にはいなかったのです。
あの苦しい練習は何だったのでしょう。何のために貧血を起こして倒れなければならなかったのでしょう。
その後、小学校は、土地をデパートに売って、別の場所に引っ越しました。ママたちが倒れた校庭はもうありません。でも、別の場所に移った小学校の校長室には、オリンピックに出場した生徒たちの行進の写真が、いまだに飾られているそうです」
「なかなか、感動的な話ですな」
校長はそういって居住まいを正すようにソファに坐り直した。
裕子は、フッと笑った。
「ですねえ……でも、その写真に、ママたちは写っていません。その年に出場した生徒たちも、一人になると、写真が小さすぎて誰が誰だか分かりません。写真には、昭和三十九年十月二十五日栄光のオリンピック出場……と書かれてあるだけです」

「それでいいのです。個人ではない。学校としての努力のたまものですからな」
「ですね……」
裕子は、くるりと浩に振り返っていった。
「学校に頼んでも甲子園は無理だわ」
裕子は校長にきびすを返し、頭を下げた。
「ご迷惑をおかけしました」
「うむ、わかればいいのです。わたしとしても、これ以上、甲子園のことで処分者を出したくない。今回だけは不問にするつもりです。以後なにかをやるときは必ず、学校の許可を取るようにしなさい」
裕子は、校長を見すえて、つぶやいた。
「では……、では……、では……の出羽三山……」
裕子は浩を引きずるようにして校長室のドアを開けた。
だが、このまま出ていっては文字どおりさんざんだ。
裕子は立ち止まった。
「この学校も、ママの小学校と同じなんですね」
「ん？」
校長は、裕子を見た。
裕子はくるりとふりかえった。

「ママは、それから四年ごとに欠かさずオリンピックの中継を見ています」
「そりゃ当然だろう。少なくとも、君のお母さんは、オリンピックに関わりがあったのだからね」
「はい、ママはいつもいっています。ひよわで、だらしなくて、情けなくて、数ばかりそろえて、オリンピックに出場したがる日本が……」
「なに？」校長は、眉をしかめた。
「こてんぱんに負けるのが楽しみなんだそうです」
裕子は軽く頭を下げて、浩と校長室から出ていった。

＊

野球部に戻った二人を、みんなは待ちかまえていた。
裕子は黙って首をふる。
部屋中が溜め息だ。
「そんなことだろうと思っていたわ」
国会議員の孫娘、知保がそういって、由起子になぜかVサインをみせた。
「うん、やっぱ、よかったね。新聞社に行って……」
由起子もVサインだ。
「新聞社？　なんのこと？」

裕子は、キョトンと二人を見つめた。
由起子はチッチッチッと人差し指を立てて動かした。
「お若いの、まだまだ、あきらめるわけにはいかんのよねえ……。せっかく写した藤石君と平和さんの密会激写、無駄にしたら未来のプロカメラマンとしては、涙ぐんじゃうわけ」
「学校さんもアウト、高野連にもシカトされ……、でも、もう一つ忘れちゃいませんか?」
「そか!」
裕子は、指をパチンと鳴らした。
「そもそも、春夏の甲子園は、新聞屋さんがやっていたのよね」
「そのとおり……。知保のじっちゃんの親友でさ、政治担当の新聞屋さんに頼んで、朝陽新聞の事業部のトップに会わせてもらったの」
「へえ、政治家さんって、新聞屋さんと仲いいんだ。いつもは喧嘩しているみたいなのに……」
新聞といえばスポーツ新聞の芸能欄のほかは興味のなさそうな久美が、それでもいちおう政治面にも目を通していることを証明した。
「ほんとは友達というよりグルかな……。かけひき、かけひき、なにごともね」
知保の口癖が出た。
「でも、なぜ知保が?」
いつもスフラン・フラスクを手ばなさず、いうことは投げやりな知保が、こんなに骨を折っ

てくれるのが不思議だった。
「わたしゃね、どうせ大学出たら、じっちゃんの決めた東北のどっかのぼんぼんと見合い結婚……。これ、大山家の女として生まれたときから決められているのでございます」
「信じられない。まるで戦国の女たち……。NHKの大河ドラマよねえ」
久美が目を輝かせた。
久美としては、芸能界にデビューしたら、五年ほどで青年実業家なる人種を見つけ、結婚するライフプランを持っている。
「でも、知保のほうが格好ついちゃうかもね。知保は悲しき運命の女でございました。いいなあ」
本気で知保の世界をあこがれ始めたようだ。
知保は話を続けた。
「ま、大学に入ったら、私に変な虫がつかないようにってんで、うちの監視がきびしくなるわ。なんかやるなら今のうちだと思ったりしてさ……、裕子」
「ん？」
「わたし、でっぱっちゃったかな？」
知保は小首をかしげて、裕子に苦笑した。
裕子は知保を見つめ、黙ってペコリと頭を下げた。
「よかった……。でさ、由起子とわたし、写真と資料をもって新聞社に行ってきたの。事業部

のボス、編集長に資料を回してくれるって……、もち高野連もね……」
由起子が、頷いた。
「近いうちに新聞に載ると思うわ、甲子園に出場すべきなのは松高だってね！」
「そうね」
ファイロファックスにメモを取りながら、直美が――、
「確か朝陽新聞の発行部数は五百万部よね。朝陽が動けば、ほかの新聞も動くわ。もちろんTVも黙っちゃいない。あっというまにマスコミのいったことがみんなの意見になって、出せ、出せ、松濤。世論はもりあがり、それでめでたし甲子園か……」
直美は、ファイロファックスをパタンと閉じた。
「こわい国よね。日本って……」
「ええ、こわいわ、新聞って……」
志津が誰にも聞こえないような小さな声で呟いた。

第四章

パインウェーブの誓い

その日から、野球部と応援部のみんなは、新聞を待ち続けた。
朝も暗いうちから、渋谷駅のキオスクに新聞を買いにいくものもいた。
前夜の「明日の新聞」というニュース最終版を見続けた。
ついでに、CNNニュースも見た。
ニュースと名がついているだけに、見ないと落ちつかなかったのだ。
ケーブルテレビジョンの文字ニュースも、つけっ放しにした。
この一年、テレビといったらビデオとゲームと野球中継しか見たことのない彼らが、これだけオン・エアしているテレビを見続けたのだ。
若者のテレビ離れが慢性化している昨今、これを知っていたら、各テレビ局は渋谷に足を向けては寝られないだろう。
だが、三日たっても、四日たっても、新聞やテレビにあの事件の真相が出る気配はまるでなかった。
一週間がたった。

試験前ですら寝不足になったことのない彼らが、徹夜明けの麻雀のような顔で、野球部室に集まってきた。
みんなくたびれ果てていた。
この一週間、彼らは、渋谷駅前の三千里薬局を喜ばせただけだった。
この薬のディスカウントショップで、ユンケル黄帝液が異常に売れだしたのだ。
しかも、買っていくのは、いつもの中年のおじさま族だけではなく、リポビタンDでも鼻血が出そうな若い男女たちだった。
教科書以外、めったに活字を読んだことのない連中が、新聞を読み、夜を徹して、水平解像度七百本以上のブラウン管を見続けたので、体調不全を起こして疲れきってしまったのだ。
野球部室の椅子にげんなりと倒れるように坐った彼らは、しばらくして、部屋の隅からグスン、グスンと鼻をすするような音が聞こえてくるのに気がついた。
いくら疲れていても、甲子園が近い時期だ。ばかでなくても風邪をひくはずのない季節だ。
みんなは部屋の隅に目をやった。
知保だった。
泣いているのだ。
「どうしたの、知保！」
駆けよった裕子に、
「記事は出ないわ……挫折よ……。ああ……、わたし、国会議員、大山栄作の孫娘として生ま

れたことに気づいた五歳の秋以来の挫折感だわ」
知保は、ぽつりぽつりと話し始めた。
——知保の祖父の大山栄作は、東北にある地元の新幹線の新駅建設にからむ汚職事件で疑惑をかけられ、議員の誰もがするように、海外視察を名目にして追及を逃げていた。
政治家の噂は二週間——ほとぼりさめたのを見はからって、二日前に帰国した。
そして、昨日の夜、知保は栄作の書斎に呼ばれた。
栄作の前には、知保と由起子が新聞社に持ち込んだ資料が置いてあった。
栄作は、知保を見るなり、いきなり口を開いた。
「つまらんことで新聞を利用するな。新聞は、自分の身を守るために使うものだ。新聞を黙らすには、それなりの玉がいる、新聞に借りもできる。それを回収できる計算がなければならん」
知保にもそんなことは分かっていた。
「でも、今回は黙らすんじゃありません。本当のことを書いてもらうんです」
栄作は苦笑した。
「知保は若いのう。お前もやがて政治家の嫁になる身だ。新聞というものをもっと知っておいていいだろう。新聞はうそをつかない、間違いを書かないのが建て前だ。だから、国民は新聞を信用している。だが、一度でも間違いを訂正してみろ。うそをつかないはずの新聞がうそをついたことになる。新聞は間違いを報道しても、それを間違いと認めてはならんのだ。

だから、具合の悪いことはな、記事になる前に黙らせることだ。記事にされたら、取り消しはできないのだからな。だから、邪魔なやつがいれば、新聞に書いてもらう。そうすればな、書かれたやつはつぶれる。それがたとえ本当のことでなくてもな。新聞を使えば、時の総理大臣さえつぶれる。そういうふうに利用するのだよ、新聞は……」

知保は、ぼんやりと書斎の新聞入れを見つめた。

ずらりと並んでいる新聞……日本の大新聞社の特徴は個性がないことだといわれている。どの新聞を読んでも、書いてあることに変わりがない。どの新聞をとっても同じなのだ。

「お金がかかるんでしょうね、新聞を動かすのって……。似たようなのがこんなにあるんですもの……」

「金だけではない。いろいろ手間がかかる……それだけに、新聞の使い道は、慎重に考えねばならん。いいかな、たかが高校野球の東京代表がどこになろうと、大山派になんの益がある？わしの地元は東北じゃよ……。それに、今は東北新幹線が煙を吐いている時期じゃ。ところがどうだ？　わしにきなくさい噂があっても、新聞には出ていないじゃろう。当然じゃ、わしが押さえているからだ」

栄作は、ロンドンのダンヒルで特注したトルコ葉の葉巻に火をつけた。

知保にとって、子供のころから、夜、うなされるほどいやなにおいだ。

おかげで、そのにおいを消すために、六歳のときから、ダンヒルのメンソールを喫っている。

肺ガンになったら、明らかに、栄作のせいだと知保は思っている。栄作は煙を吐き出していっ

た。
「だが、今、わたしが高校野球にくちばしをいれてみろ。黙らしている連中がどう動くか分からんぞ。なにしろ、高校野球は、あの新聞社の一大文化事業だ。やつらの反感を買ったらどうする？　わしは、新幹線を止め、高校野球を動かした代議士として、新聞に書きたてられたくはない。お前も大山一族の一員なら分かるね……」
知保はうつむいた。
「忘れなさい。さあ、これでも飲んで……」
栄作は、ブランデーグラスにクオバジェのVOCを注いで知保にすすめた。
そして、自分は東北の名も知らぬ二級の地酒を冷やでコップにそそぎ込んだ。
大山栄作が、地元を大切にするいい先生さまだという評判だけは、少なくとも確かなようだ。
……どうであろうと三流よ、日本は、政治家も、新聞も、都立高校も……
知保はグラスのコニャックを一気にあおり飲んだ。
なに、このぐらいの一気飲みは、いつものことだ。今も知保の部屋のたんすの中には、栄作あてに送られてくる山のようなお歳暮やお中元の中からかすめとったロイヤルサルートとバランタインの三十年と、環六沿いのセブンイレブンで買ったサントリーレッドがかくされていて、週に五日はボトルの半分が消えていく。
ポケットスフラン・フラスクに入れた酒の量も少なくはない。
まだアル中までにはなっていないと思っている知保だが、政治家の妻になり、キッチンドラ

ンカーになったら、それは、ほとんど、祖父の大山栄作のせいだと思うことにしていた。

＊

知保の話に、野球部室のみんなは黙りこくっていた。
いきなりテーブルがドンと叩かれた。
「そうよ！　新聞なんて！　あてにしちゃいけないのよ！　思ったとおりだわ」
みんなは目を見張った。
その声は、めったに発言せず、いつもどこに存在しているか分からないような女の子、志津だった。
志津は我に返って、うつむいた。
「ごめんなさい……。ただ、わたし、こんなことになるんじゃないかって……、その……、心配だったんです」
「なぜ？　なぜそう思ったの？」
裕子が志津に聞いた。
「わたし、信じられないんです。嫌いです、新聞。……だから、わたし、小学校の五年生のときから、新聞読んでません」
「そりゃ、俺だって今でも新聞は広告しか見ないけどな」
健がいった。

確かに情報を知りたければぴあやシティロードがある。TV番組を知りたければ、しにせのTVガイドをふくめて、本屋の店先にはその手の雑誌があふれている。
週刊誌をペラペラめくれば、その週に何が起こったか見当はつく。なにも新聞なんか読まなくても、高校生に困ることは何もない。
おまけにめったにチリ紙交換がやってこない今ごろだ。
新聞紙は、トイレットペーパーの役にもたたない。
それにしても、日記を欠かしたことのない志津が……、いわば文字中毒の志津が新聞を読まないのは、いささか妙だった。
「話が見えないわ。志津のいっていること」
みんなもそれぞれ頷き合った。
「そうでしょうね……」
志津はコクリと頷いた。
「小学校五年のときだったわ。渋谷区が『今の渋谷をどう思うか』って作文の募集をしたの。わたし、お話を書くのは好きだったけれど、感想とか意見をいうのって苦手だったから書きたいと思わなかった。でも、クラスで一本は必ず応募しろって、校長先生が決めたらしくて、担任の先生が、無理矢理、国語の成績がよかったわたしに書かせたの。そしたら、それが小学校の部で入選しちゃって、新聞社の記者が、新聞の城西版に載せるからって取材にきたの……。
さんざんわたしのことをほめて、ママがあわてて買いにいった「粉と卵」のケーキをムシャム

シャ食べて帰っていったの。あれ、うちのレベルじゃ、けっこう高いケーキなんです。だって、誕生日のときしか食べたことなかったもの……。

そして記者の人、明日の朝刊、楽しみにしていてください……、なんていって、ママを感動させちゃって。

新聞には出たわ。とくに中志津さんの作文は素直で選者から高く評価されたって、書いてあって、その文章の一部分が載っていたの……。でも、でもね、その文章は、中学生の部で入選した人の文だった……。

新聞社の人が、間違えたらしいの……。ママは、そんなことは知らないから、文章まで載っているわって喜んで、渋谷中の新聞屋さんを回って売れ残った朝刊を買ってきたわ、五百部以上も。ママには悪いと思ったけれど、わたし、新聞社に電話したの。あれ、わたしの作文じゃありません……って……。調べて訂正文をのせるなり、善処しますって、電話に出た人がそういったわ。でも、訂正文なんて出なかったわ。それっきり、新聞社から連絡もこなかった。学校の担任は、わたしにいったわ、誰にでも間違いはある……。名前と学校名が出たんだからいいじゃないかって……。結局、学校は何の抗議もしてくれなかったわ。そして、表彰式のとき名誉だ、名誉だって、校長も担任もニコニコ笑っていた……。でも、小学生の作文に間違われた中学の部の入選した女の子とわたしだけは泣きそうな顔してた……。その人の名前、今も忘れないわ。倉島礼子さん……、受賞の三カ月後に東邦生命ビルから飛び降りて自殺したの。新聞は原因不明の自殺……、死にたがる子ら……。キャンペーン記事まで特集していたわ。倉島

さんって……、小説家になるのが夢だったんですって……。未来の女流作家をゆきづまらせたのはいったい何だったのか？　われわれは、この年ごろの子供たちを注意深く見つめるべきであろう……。新聞記事はそう書いてあったわ。でもね、わたしわかっていたんです。だって倉島さんの入選した作文はね、東邦生命ビルから渋谷を見降ろした感想を書いたものなの……」

　みんな声もなかった。

「わたし、押し入れの中から、ママの買ってきた新聞を出して燃やそうとしたわ。会社のアパートだから、燃やせるほどの庭もないし、台所で焼こうとしたの。そしたら日清サラダ油に燃えうつっちゃって、消防車が何台も来たわ」

「あっ、憶えている……」

　涙ぐんでいた知保が顔を上げた。

「五年のときでしょ？……うちの裏庭の向こうにあるアパートのボヤ……。わたし、消防車が火を消すのって初めて見たんだ。ずーっと塀によじ登って見ていて、肺炎になっちゃったんだけど、あれ、あなたがやったんだ」

　志津はふっと笑った。

「あれから新聞は読まないことに決めたの……。人に見せる作文を書くのも止めたわ。でもせめて日記だけは正確につけようと思ったの。だって、だって、自分のこと、間違えられて書かれるのって……、それ絶対……、絶対……」

　志津はそこまでいってうつむいた。

ポツリとテーブルに涙が落ちた。
「頭きちゃうなあ！」
由起子が叫んだ。
「こうなったら、フォーカスでも、フライデーでも、東京スポーツでも、週刊実話でもかまわないわ。せめて本大四高の甲子園行きだけでもつぶしてやらなきゃ！」
「無駄だよ……、そんなことをしても……」
野球部の戸口から声がした。
みんなは声のほうを見た。
見慣れない男が立っていた。
「あ、俺、新井行夫、三年一組」
「三年一組？」
浩は納得した。
なるほど見慣れないはずだ。三年一組といえば、松濤高校で唯一の国立理工系志望者のクラスだ。受験ひとすじ——、受験生のそれぞれの弱点を補強するために、普通の授業は受けていない。ほとんどが自習時間のようなもので、生徒はめったに教室の外に顔を出さなかった。彼らがやっているのは、夜通う、予備校の現役クラスの予習・復習だ。
それでも、国立への現役入学者はここ数年一人もいないのだから、松濤高校の学力レベルは、三流の名に恥じず相当なものだ。

しかし、この松濤高校では、一応、エリートクラスである。
「三年一組が、何の用？」
浩は、つっけんどんに聞いた。
別に彼らにコンプレックスなど感じてはいないが、それらしくふるまうのが並の人間らしくて、この学校ではおしゃれだったのだ。
新井はずかずかと部屋に入って来ると、あいている椅子の背を前にしてまたがるように坐った。
「あんまり君たちが夢中なんで、黙っていられなくなったんだ。甲子園なんぞに行ったら、バットの先がくさっちまうぜ。やめとけ、やめとけ……。エイズよりたちが悪いぞ」
エリートを自任しながら、こういう台詞を吐くのも、新井としてはおしゃれのつもりだ。
「野球が、試験に必要ない人には関係ないでしょ」
ムッとした裕子がしゃれっけなく答えた。
「新井という名じゃ、関係ないが、江川といったらどうなる？　うちのかあちゃんの結婚前の姓なんだがな」
「江川？　高校野球に巨人の解説者はいらないわ」
「いやだねえ、甲子園に行きたいってのに、ちょっと勉強不足じゃないの……」
「江川総一郎……高野連の副会長ね」
直美が新井には目もくれず、ファイロファックスにメモしながらいった。

「高野連の副会長‼」

　みんなは、新井をまじまじと見た。

「そ、本大四高は、君たちが何をやっても出場できるさ。高校野球は、犯すべからざる純粋で、清潔な青少年の祭典だ」

　みんなから自嘲ぎみの笑いがもれた。

「それを国民に知らしめるために、出場校に一校ぐらい不祥事はあってもいい。出場を辞退させれば、それだけ高校野球の清潔さがひきたつ。けれど、たびかさなっては困る。しかもそいつが甲子園に行きたいがための不祥事だとすれば、高校野球は、不祥事をあおりたてているといわれかねない」

「事実はそうかもね」と裕子が呟いた。

　本大四高の藤石だって、甲子園がなければ、あんなことをたくらみはしなかっただろう。

「事実さ……」

　新井行夫は平然と答えた。

「だいいち考えて見ろよ。今どきの高校生で、高野連のいう、不祥事なしで生きていけるやつはいるかい？　この中で、酒も煙草も、喧嘩も異性も知らないやつがいるか？」

　裕子がうんざりしていった。

「自分のライフサイクルで人を見ないで……。で、いったい、あなた、私たちに何をいいたいわけ？」

「どこの学校にだって不祥事はあるってこと。けれど発表されないだけだ」
健が頷いた。
「まあ、期待すべき理想の青少年ちゅうイメージを大日本国民衆に知らしめちゃうのが、高野連のおつとめだもんね。母校のため、自分を捨て、全員一丸となって勝利、勝利さ」
直美が呟く。
「高校野球のバントがプロより上手くなるわけよね」
行夫が肩をすくめた。
「それ、それさ。味方が勝つためには自分が死んでもかまわない、それこそ、日本のヤングの理想像さ」
「嫌よねえ、おまけに日本人って、その気分に乗りやすいタイプだもん」
久美が呟く。
「ああ……、純粋だ、清潔だ……。これが青春だ！」
昇が、溜め息をつく。
直美が誰に語るでもなくいった。
「だから、高校野球をネタにして、新聞を拡張したい新聞社が協力する。ＮＨＫも放送する。出場する学校にとっても、これほど効果のあるＣＭはないわ」
「政治や宗教と同じね……、名をあげれば、人とお金が集まってくる。寄付という名でね」
知保が、ポケットフラスクをあおる。

「みんなニコニコ、素晴らしき高校野球さ……」
行夫がみんなを見回し、あわれむようにいった。
「要するに、私たちが何をやっても、一度、決まったことは変えられないのね」
裕子はくちびるをかみしめた。
行夫は頷く。
「そう、高野連も新聞も、死にもの狂いで、本大四高を守るだろうね。不祥事は一校でいい。いくつもあっては、高校野球自体がダーティなイメージになる。とりあえず、松高の野球部は甲子園に出られなくて、かわいそ、かわいそ、同情だけは引いて……。だけど来年は誰も憶えてはいないよ。そして、また甲子園の夏が来るのさ」
裕子は行夫を見すえた。
「新井さん、なぜ、そんなことをここにいいに来たの？」
行夫は、さみしそうに微笑した。
「さあね……。ただ、俺あ、高校野球が嫌いだ。いくら、俺たちが熱中したって、所詮、何かに利用されているだけさ」
行夫は立ち上がった。
「みんなも、こんな下らないものにこだわるのは止めておくんだね……。では、忠告、オワリッ！」
行夫は後も見ずに部室から出て行った。

裕子は、ぼんやりと行夫の出て行ったドアを見つめている。
空しかった。
結局、みんなの前に残っているのは、甲子園というエサをぶらさげられて空騒ぎをして、やめさせられないでいい退学者、けい子を出しただけだったのか？……
浩は、裕子の横顔が痛々しくて、見るに耐えなかった。
健がふっと笑って伸びをした。
「あ〜あ……。まあ、俺はこれで、甲子園で無駄な球を投げずにすんだわけだ……」
健はグローブを持って立ち上がった。
「おい、バッティング練習でもしないか、よかったら俺の球を打ってみろよ？」
みんなは健を見た。
「俺の球を打てる力があったら、きっと甲子園で優勝できただろうよ。なにしろ俺は、どんなチームが相手でも完封するつもりだったからな……」
いままで、練習では一球も球を投げないと宣告していた健が、バッティング投手をやるというのだ。

＊

グイーン！　風を切る音が、ベンチにまで聞こえてくる。
健のボールはあきれるほど速かった。全く手を抜いていなかった。

健は、ストライクゾーンのど真ん中に一四七キロのストレートを投げ続けた。
球拾いをかねて守備についていた野球部員は、何もすることがなかった。
健は、キャッチャーもいらないといった。
試合ならともかく、練習で健の快速球を受けそこなって怪我でもされては困るというのだ。
健の球は、バックネットの下のコンクリートに当たってまっすぐピッチャーズマウンドのところへ戻って来た。
健は、八十一球を投げた。
一試合分、二十七アウトに、スリーストライクずつの最少投球数だった。
ど真ん中に投げているのが分かっているから、誰も見送りはしない。
バットを、ストライクゾーンの真ん中を目当てにふりまわした。
それですら誰もバットにかすらなかった。
打たせてやろうなどというサービスを、健はいっさいしなかった。
それが、かえってすがすがしかった。
九番目打者が三回目の打席に入り、そのバットが空を切ったとき、健はつぶやいた。
「また三振か、これじゃ、うちが勝てるかどうか、さっぱり分かんねえなあ」
そのとき、ベンチでほおづえして見ていた裕子が立ち上がった。
「わたしにも打たせて！」
一同は呆気にとられて裕子を見つめた。

「延長戦だね……。ま、いいや」
健はうなずいた。
バッターボックスに入った裕子は、バットでレフトスタンドを指した。
格好だけは、ベーブ・ルースの先指定ホームランだ。
「手かげんなしねっ！」
裕子が叫んだ。
「手かげんはしない。けど、女の腕じゃ、万が一、バットに当たったときに、腕がポキンといっちゃうかもしれないぜ」
「打たれる気もないくせに……」
健はニッと笑った。
「まあな……。ともかくバットをしっかり握ってホームベースの真ん中に出しておけ」
「バントはいや……、絶対いや」
裕子は首を振った。
「バントじゃない。俺の球に遅れないようにするんだ」
「なるほど……」
裕子は納得して、バットを出して構えた。
バッティングというより、むしろ剣道の中段の構えだった。
健が、ボールを投げる。

ゴーッ！

突風が裕子に襲いかかる感じだ。

……ひえっ……、びびるなあ……

無茶苦茶な恐怖だった。

ふき飛ばされそうだった。

「やっちゃえ！」

目を閉じて、バットを風に叩きつけた。

裕子の体は、三回転半して、後ろに尻もちをついた。

「二秒は遅れているよ。俺の手から球が離れたら、気持ち、ONEで、すぐ振ってみろ」

健のアドバイスに裕子は黙って頷く。

健が二球目を投げた。

「ワン！」

そう叫んでバットを振る。

また尻もち。

我に返ると、健はバックネットの壁からはねかえった球を、グローブに入れていた。

「これで最後だよ」

裕子はどうしても打ちたかった。

いや、せめてかすりたかった。

圧倒的な勢いで襲いかかってくる健のボール。必死で打とうとしているのに、全く無視してストライクゾーンの真ん中を通り過ぎていくボール。
手も足も出ないのか……。
健のボールが、校長や高野連や、新聞社や、いや、それはかりではない、甲子園から松高生をしめだしたもの全てに思えてきた。
裕子は歯を食いしばり、バットを握りしめた。
健はボールをつかんだ。
……これが高校生活最後のボールか……
健の思いも特別だった。
健は、ふりかぶった。
投げた。
カシーン！
金属バット特有のキリキリするような耳ざわりな音がした。
「えーッ！」
みんなは目を見張った。
裕子のバットは、健のボールをとらえていた。
すさまじい衝撃だった。裕子は横倒しになって砂まみれだ。
まいあがった砂のむこうを裕子はぼんやりと見た。

ボールがゆっくりとバウンドしながら、一塁の横を抜けていく。
ファーストは、呆気にとられてつっ立ったままだ。
「走れ！　裕子！」
浩が思わず叫んだ。
「えっ？」
裕子は振り返った。
「打ったんだ、走れ！　裕子！」
浩は手を振りまわした。
自分がなぜこんなに興奮しているのか浩には分からなかった。
今まで、けっして呼びすてにしたことのない裕子の名を叫んでいる自分にも気づかなかった。
裕子は立ちあがると猛然と一塁に走っていった。
「たいしたもんだ……」
ピッチャーズマウンドで健は呟いた。
裕子のバッティングのことではない。
健は、最後の一球を全力で投げたのだ。
ボールは、裕子がバットを振る前に、バットの真芯（ましん）に当たった。
もしかしたら一六〇キロは超えていたかもしれない。
素人のかまえたバットにボールを当てるなど、子供の頭の上のりんごを狙（ねら）ったウィリアム・

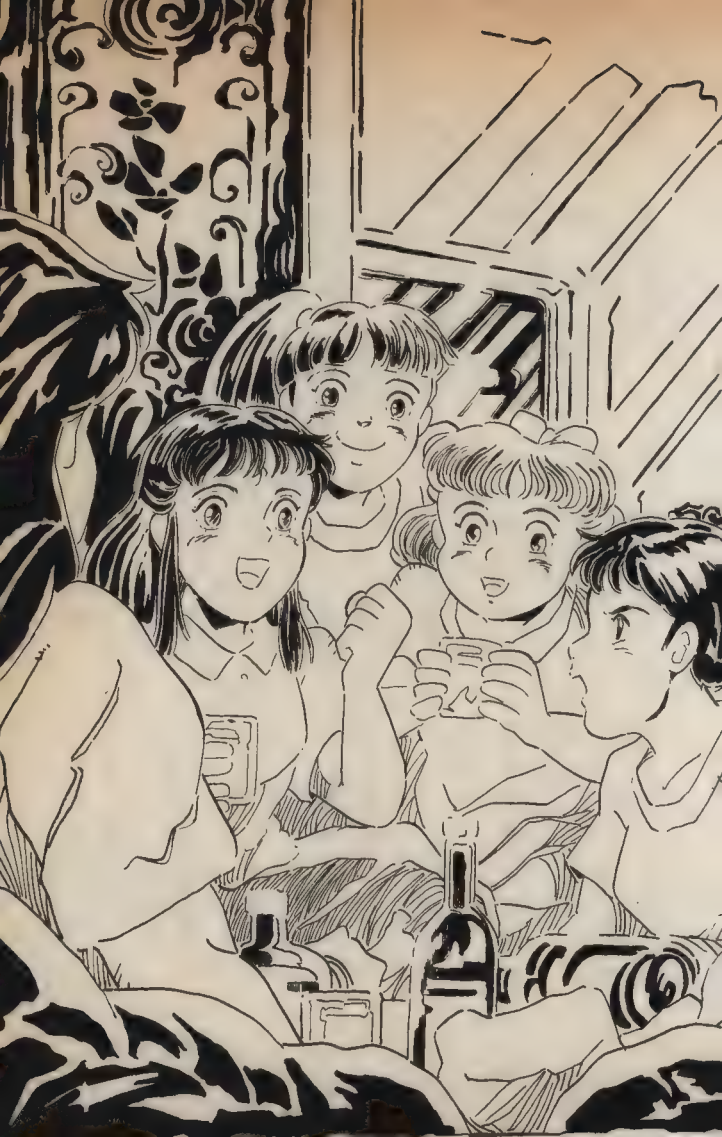
テルの弓矢もまっさおになるだろう。
それに、こっちは硬球なのだ。危険度は弓矢にひけはとらない。
健は、自分の投球に満足していた。
裕子が打った球は、外野にころがっていった。
外野は誰も追いかけなかった。
「走れ！　走れ！」
浩の音頭に、応援部の黄色い声が加わった。
「走れ！　走れ！」
守備についている野球部も叫んだ。
裕子は、懸命に走った。
外野のボールは、ライトの後ろで止まった。
誰も拾いにいかなかった。
二塁を回ったとき、ふいに裕子の目から涙が出てきた。
「ちくしょう！」
涙を払うように猛然と走る。
「走れ！　走れ！」みんな、声をそろえた。
あたりは夕暮れだ。
松濤公園の木々の上に、大きな夕陽が落ちかかっている。

三塁を回った裕子は、ホームベースの前で立ち止まった。
そして、飛びあがって思いきりホームベースを踏みつけた。
パチパチと、健がゆっくりと拍手した。
みんなも拍手した。歓声があがり、猛烈に拍手した。
ホームベースの裕子にみんなは駆けよる。
「打てたじゃない」
「すごいわ、裕子」
ライトの土屋昇が、ボールを拾って持ってきた。
健がボールを受けとって、裕子に手渡した。
「延長十回、サヨナラホームラン。俺たちは甲子園で優勝できたさ、出場すればね」
「ああ、きっとね」
浩が頷いた。
夕陽が大きかった。
これが青春だった。
そして、松濤野球部の青春の祭りの終わりのときだった。
一同は、沈みゆく夕陽を見つめた。
誰かが、甲子園で歌うはずだった松濤高校の校歌を口ずさんだ。
やがて、それは、合唱になり——。

誰の目にも夕陽をとかしこんだ涙が光っていた。
「冗談じゃないってのよ。いい高校生ががん首そろえてさ」
裕子がぼそりといった。
「あん？」
みんなは、裕子を見た。
涙なんか一滴もない泥だらけの顔だ。
裕子は、手に持ったボールを足元に落とした。
「……自己憐憫（れんびん）は一人でこっそりやるもんだわ」
「それが正解です」
直美が平然といった。
みんな、ダーッと溜め息である。
……わかっちゃいるけど、そういわれてはミもフタもない。
「でも、いっしょにやろうよ。これ」
由起子が手酌（てじゃく）のふりをした。
「ね、うちにいこ！　けい子も呼んでさ。ねえ、この中で飲めない人いる？」
誰もいなかった。
おまけに、今日は土曜日だ。
いうまでもなく、次の日は全国的に日曜日だ。

二日酔いでもかまわないのだ。

＊

その夜は、もう何が何だかわけが分からなくなってしまった。
甲子園の「残念会」という名目だったが、残念気分は、ラブホテル「五月女」に入るまでだった。
由起子が両親に頼んで用意した部屋は、「五月女」で最高のスウィートルーム「パインウェーブ」だった。
早い話が「松濤の間」である。
その筋では天下に名高い渋谷の円山町――そのしにせの「五月女」のデラックスルームだ。
そこらの恋愛関係じゃあ、もったいなくて気楽には入れないような部屋だ。
三十人は入れるリビングには、詳しいことは想像にまかせるが、ディズニーランドの室内版といった感のさまざまな仕掛けがある。
高校生のみんなにとっては、興味津々の玩具箱だ。
「ここだったら、何をやったって外にはもれないわ」
渋谷に飲み屋は数知れないが、面のわれている地元の高校生は、酒を飲むにも苦労が絶えないのだ。
奥のベッドルームには回転上昇波乗り体感ウォーターベッドなる代物があり、動かし方によ

っては、後楽園のダブルループのコースター並みのスリルが味わえる。

さらにその向こうのガラス張りのバスルームは、プール並みの広さの浴槽に、すべり台やブランコ、シーソーまでついている。

その部屋のことを、テレビ放送のトゥナイトという深夜番組で知っていた久美などは、ひそかに、ジャンセンのハイレグとビキニを二着、持って来ていた。

リビングルームではさっそく酒盛りが始まった。酒はほとんど飲み放題だった。

「新聞社がアウトだった罪ほろぼしは、じっちゃんにやってもらうわ……」

そういって、知保は大山家の倉庫から、ダンボール三箱分の酒瓶を無断拝借（ノンカードリース）し、超特急便で送り届けてきた。大山家には、郵便局や宅急便の出入りが多い。自分や友達を使って持ち出すより、よほど目立たなかった。

つまみはそれぞれの自前だが、渋谷駅付近の食品売場は、六時半をすぎると大幅に安売りを始める。

深夜になれば、高級レストランがこっそり売れ残りを、ただのような値段で売ってくれるのは、古くから円山町にあるホテル「五月女」の特権のようなものだった。

「さよなら甲子園！　くたばれ甲子園！　二度と会わない甲子園！　タイガースとともに消えちまえ！」一同は乾杯した。

タイガースが引きあいに出されるのは気の毒な気もするが、野球でイライラさせられる存在だったのは、今回の甲子園と同じだ。

みんなの酒を飲むピッチは早かった。

とはいえ、渋谷の路上に倒れている酔っ払いを子供のころから見慣れている彼らだ。一気飲みなんてばかな真似はしない。

だが、知保の家はさすがに上等の酒を飲んでいる。アルコールをただの色つき水でうすめたようなどこかの国産ウィスキーではない。

悪酔いもなく、すんなり肝臓にしみ込んでいく。

「アルコールの血中濃度が二百ミリグラムパーセント以上だと、急性アルコール中毒になる危険があるわ」

みんなに忠告していた直美ですら、一時間もしないうちに、胸にひしっと抱いたワイン・ロマネコンティが空になっている。

このごろの渋谷の学生は、女の子のほうが酒に強い。

飲みにさそわれる機会が多いし、しかも飲み代は男持ちが常識だ。

さいふの中身を気にせずに飲めるし、気をつけるのは酔って妙なところへ連れていかれないようにすることだけだった。

酔わないで飲む……。自然に訓練ができて酒が強くなる。

女性軍はぴんぴんしていたが、いつの間にか野球部員は酔いつぶれ、ベッドや床におりかさなっていた。

浩も例外ではない。

どれほど眠っていたのだろう。ふっと目を醒ますと、天井が回っている。
天井に仕掛けがあるのではなく、自分の目が回っていることに気づいたとき、部屋の中央のソファにあぐらをかいてブランデーグラスをかたむけて話し合っている女の子たちのろれつの回らない声が聞こえた。
「まともじゃないよ。この国は……」
裕子の声だ。
「ほんと、真実が真実と認められないんだもんね。これじゃあ、写真があっても意味ないわ。大事なところはぼかしになって見えやしない」
由起子が頷く。
「みんな、ぼかしはいけないって文句はいうけど、それ、口だけだもんなあ……。けっこうぼかされて、それが気持ちよかったりするんだよね」
けい子が、ぐいっとグラスを飲みほして、ふっと息を出した。
「うん、フォーカスやフライデーなんかで、撮った撮られたって騒いでいたって、けっきょく、それをみんな楽しんでいるだけでさ、何が写っているのかまで考える暇なんてないんだよね。本当のことがぼかされていなかったらよ……、もしも本当のことが写っていたら……、わたしたち、何かを考えたり、何かをしなきゃなんなくなって、これって……面倒臭いもんね……」
由起子の言葉に裕子は何度も頷いた。
「ほんとは面倒くさかったんだ。わたし、甲子園のこと、面倒くさくてたまんなかった」

「でも、やるだけやったじゃないか、裕子はさ」
そういって、けい子が裕子のグラスにヘネシーのクリスタル・デキャンタを注いだ。
「面倒くさくなったら、本当だった甲子園がうそになっちゃう……。そう思ったのね……。でも、やればやるほど、ぼかしがかかって、甲子園がうそになっていっちゃった」
「こんな国いたくない。日本人って嫌いだわ」
知保が、投げやりにいった。
「でも、日本語しゃべってちゃ、マドンナにもマイケル・ジャクソンにもなれないしね。わたしたちは、ぶりっこして松田聖子になるしかないんだわ」
久美が禁煙パイポを吸いながらいった。
知保は、ダンヒルのメンソールに特用燐寸（マッチ）で火をつけ、煙の輪をポッと吐き出した。
「わたし、外国に住もうと思ったこと、何度もあるんだ。日本人はさ、なまじ言葉が分かるから相手のうそが分かってつらくなるでしょ、じっちゃんの世界なんて、そればっか……。お互い、うそが分かっていて、それでも、ホントぶりっこしてつきあってる。けど、けどさあ……、外人は言葉が通じないから、うそも本当も分かんないね。うそつかれたってあきらめつくじゃない。言葉の分からない私がばかなんだ……ってね」
知保は、マルベリーのバッグからパスポートを出した。
「いつも持ってんの……、日本のパスポートって赤くて大きくてなんか下品……。でもさ……、無理なんだよね」

グビリと、デキャンタをあおり飲む。

「日本人は、日本に属していなきゃ、外国じゃ、ただのイエローモンキー。相手にされないもんね。食べていくことだって難しいと思う。外国で日本人が生きていけるのは、円とかかわっているときだけだわ」

知保はパスポートをバッグの中にポトリと落とした。

「だからあ……、じっちゃまのおいいつけどおり、知保は、ただ酒の飲めるところへ、お嫁に参りますの……」

「あーあ……」

溜め息が女の子たちに伝染していく。

だが、いつも泣き出しそうな顔の志津は、溜め息をつかなかった。

「ここしか居場所がないんだったら……」

志津はつぶやいた。

「独立したらいいんじゃないですか？」

「独立？……」

裕子たちは顔を見合わせた。

「わたしゃ、とっくに独立しているけど……、お嬢さんたちには楽じゃないよ。それをいいたい年ごろなのは分かるけれどね」

けいい子がニヒルに笑った。

「盃を返すって、いろいろ大変……、命がけだわ」
マキはマキの家の事情で呟いた。
「あの……、そういうんじゃなくて、本物の独立です……」
「本物の独立？」裕子が聞きかえす。
「ええ、子供のころ、たんすを開けたら、その向こうに別の国があったっていうお話、読んだことありませんか？……」
「ピーター・パンのネバーランドみたいなやつ？」
久美がピーター・パンではなく、左手のこぶしを胸におき右手を前につきだし、スーパーガールの格好をして見せた。
「ええ、似たような国の話です……。久美さん、ピーター・パンを読んだんですね？」
「ん？　いいえ？」
「じゃ、ディズニーのアニメ？」
「ううん、幼稚園のとき見た新宿コマのミュージカル。確か、ホリプロのアイドルよね、あれやっているの……」
「あのね……、独立の話なんですけど……」と志津がひかえめにいった。
「うん、独立は大変なのよ。タレントも……」
話が前にすすまない。
たまらず志津がきっぱりといいきった。

「だから独立すればいいんです。たんすの中の国のように……」
裕子たちは、ぼけっと志津の顔を見た。
「どこに行っても日本というものから抜け出せないんだったら、日本の中に、わたしたちだけの国を作ればいいと思うんです。たとえば、松濤高のあるところに、わたしたちの独立国を」
「独立国……松濤に？」
一同は顔を見合わせた。
「独立国かあ……、面白そうだね」知保が呟いた。
「松濤が日本じゃなけりゃ、じっちゃんはただのじじいだもんね」
「もし、わたしが映画を作れば、映倫もビデ倫もなし……、ぼかしもモザイクもいらない。表現の自由……。そして、銀座のマリオンで外国映画あつかいのロードショー」
由起子がぼーっと呟く。
「国境があれば、縄ばりも守りやすくなるわ」もちろんマキだ。
「競争相手がいなければ、わたしの歳でも、まだまだ国家的なアイドルスターよね」
久美がニッと笑う。
「国籍かえても、一人ぼっちにかわりはないさ……、グシュン……、なんてね」
けい子が肩をすくめてすねてみせる。
「かわいそ、かわいそ……。でも、あんなことで退学させないからね」
裕子が、けい子をなだめてつけ加えた。

「それに高野連もいないしね」
「新聞社もね」
志津が頷きながら呟いた。
「で、もってさ、私たちの国の中で高校野球をやればいいじゃん」
由起子がいった。
「私たちの甲子園かあ……、うん……、いける……、いける」
裕子が、親指を立てた。
みんな酔っていた。
酔って夢見る乙女たちだった。
……なかなか、かわいいとこあるんだ……
浩は寝たふりをしながら微笑した。
女の子たちは、なんだかとても浮き浮きして、
「ね、聞いて！　聞いて！」
野球部員たちを起こしだした。
「独立に参加しませんか？」
「ねえ、やろうよ」
「ねえ、手伝ってよう……」
男性諸君の意識は朦朧としていた。

しかし、女の子から頼まれるのが悪い気分のはずがない。
何がなんだか分からないが——。
「はい、やりますです！」
それ以外の言葉を思いつかなかった。
二、三、「やりましょう」の意味を取り違えたものもいたが——。
「甲子園で優勝しなくてやっていいの？」
やはり取り違えた健が、裕子にそういったとたん、
パシン！
ほっぺたを張られたのを見て、一瞬のうちに勘違いをさとった。
「……優勝じゃなくてえ、独立したら考えるわ」
さっそく、一同にシャンペンのベル・エポックが紙コップに入れて配られた。
裕子がふらふらと立ち上がった。
「では、では、われわれはここに誓います。われわれは日本からの独立を目指し、戦うぞッ！」
「オーッ！」
一同は気勢をあげ、紙コップを一気に飲んだ。
そして、目を回してひっくり返った。
あとはもうおぼろ——。

ただ一人、直美だけがファイロファックスを広げ、シャンペンをちびりちびりとなめながら、何かをしきりにメモしていた。

そして、頷いた。

「できるかもね……、独立……」

直美は、ソファに横になっている裕子を見て、ふっと笑った。

＊

これが、後に「パインウェーブの誓い」と呼ばれる一夜の顚末（てんまつ）である。

いうまでもなく、フランス革命の「テニスコートの誓い」をもじったものだが、「ラブホテルの誓い」では何を誓ったのか誤解をまねくので、旧松濤の間、すなわちスウィートルーム「パインウェーブ」の名を使用したものと思われる。

「松濤の誓い」と名づけたほうがすっきりすると思うのだが、英語にしたのは、通りの名前を、やたらと横文字に変えたがる渋谷という町の影響が色濃くみえる。

もっとも、ラブホテル「五月女」は円山町にあるため、松濤とすると、観光客が混乱する恐れがあり、その配慮のせいで英語にしたという説である。

なお、この一夜は、当事者のほとんどが酔っていたために、記憶が定かでない。

「パインウェーブの誓い」が冗談（じょうだん）であったか、本気であったかは、意見の分かれるところである。

いずれにしろ場所が場所だけに、高校生の男女たちの間に何が起こったのか、後にさまざまな推測が乱れ飛ぶ、都立松濤高校独立国のもっとも不明瞭な夜といえよう。

だが、この日から、本当の奇跡の歴史が始まるのだ。

第五章

青年は独立をめざす

次の日の昼過ぎ、それも三時ごろになってみんなはホテル「五月女」を出た。
二日酔いのはれぼったい顔で歩く裕子たちは、見た目は、まるでゾンビの集団だ。
ともかく帰って寝なければ……、挨拶もそこそこに、みんなは、それぞれの家の方向の路地に消えていく。
裕子の家は商店だ。まさか、このゾンビ顔で客の応対をするわけにもいかない。
……今日はお休み、閉店までどっかで時間をつぶそう……
裕子はそう決めて、後ろからついてくる浩にいった。
「ねえ、映画でも行く？」
だが、浩以外の手の平が、裕子の肩をポンと叩いた。
「あたたたた……」
相手は軽く叩いたつもりでも、裕子の頭の中で、サンドバッグがメトロノームのようにドスン、ドスンと頭蓋骨をノックした。
「二日酔いね。血中濃度を下げるには、アイソトニック飲料を力いっぱい飲むといいね。本当

は点滴が一番いいんだけどね」
　直美だった。
　あれだけ酒を飲んだはずなのにスカッとしている。
「直美は平気？」
「朝からポカリスエットを十本飲んだわ」
「十本！」
　考えただけで吐き気がしそうだ。
　直美は裕子の具合はおかまいなしに、
「で、やるんでしょ」
「えっ？」
「独立……」
「あっ、そうか」
　裕子は浩の顔を見た。
　浩は肩をすくめる。
　……そういえば、そんなことといって盛り上がっていたなあ……
　裕子と浩は少しだけ昨日のことを思いだした。
「なら、早いほうがいいわ。生徒会長のあなたに会ってほしい人がいるの」
「会わせたい人？」

「ええ、あの人なら、できるわ」
「できるって……何を……」
「独立に決まっているでしょう。独立するには、優秀なプランナーとブレインが必要でしょ」
「本気なわけ？」
直美は意外そうに裕子を見つめた。
「本気なわけって……、あなた、まさか独立って、例えばムツゴロウの動物王国や、北杜夫のマブセ共和国や、九州にある新邪馬台国のようなパロディの独立国を作る気だったの？　これ独立国遊びなわけ？」
「え、あ、そりゃ」
もちろん、冗談のつもりはなかった。
といってまるっきり本気だったともいいきれない。
「可能性はほとんどないかもしれないけれど、もしかしたらできるかもしれないわ」
直美はめったに見せない笑顔を浮かべた。
裕子は直美を見つめかえした。
……わたしたちの国を作って、わたしたちの甲子園をやる。高校のためでもない、新聞のためでもない、まして高野連とはかかわりのない高校生のための甲子園……
昨日のことが、ありありとよみがえって来た。
なんだかさっきまでの二日酔いがうそのように消えていた。

「OK、いきましょう……」
裕子はあっさりといった。
「早いほうがいいわ」
裕子は、すたすたと歩き始めた。
「裕子……」
後ろから直美が声をかけた。
「行き先、分かっているの？」
裕子はこけた。
……やっぱりお酒が残ってるんだわ……
直美が裕子に会わせようとしている男は小西修といい、松濤高校の二年に在籍しているという。
「小西修？　聞かないなあ……」
裕子は首をひねった。
たとえ二年生とはいっても、少なくとも、直美が優秀だといっている人物だ。生徒会会長の裕子が名前ぐらい知っていても不思議はない。
「知らないのは当然かもね、だって彼、在籍しているだけで、ここ二年間、学校に通ってきていないもん」
「二年間も？……」

「だから、二年生といっても、本当は私たちと同期なの、留年しているわけ……」
直美自身も、一年生のときに、二度ほどしか会っていないという。
「それも、学校じゃなく、代々木ゼミの入試直前の公開模試でね」
「ちょっと待ってよ」
裕子は立ち止まった。
入試直前の模擬試験といえば、大学受験ぎりぎりの最後の志望校を決める試験だ。
「あなた、一年のときにそれを受けたの？」
「うん」
直美は、当たり前のように頷いた。
「一年で大学に入れる実力があれば、あとの二年間、無駄な受験勉強につきあわずに済むでしょう」
「そりゃそうだけど……、で、どうだったの？」
「偏差値は十三番目……、上からね」
裕子の口と浩の口が同時にホケッと開けっ放しになった。
「十三番？　それも一年生で……」
「!!　東大に松高から現役で一人決定か……、甲子園出場よりも奇跡かも……な……」
浩は、数十メートルよろよろと歩いてから、やっと我に返ってそういった。
だが直美は、あっさりと期待を裏切る発言だ。

「いく気はないわ、東大なんか……。ただ実力を試したかっただけ」
直美はふっと微笑して続けた。
「そのとき、もう一人松高から模試を受けていた一年生がいたわ。その人、三人いた偏差値のトップの一人だったの。でも、よく考えると、彼一年生なんだから、実質的にはトップよね」
裕子はげんなりした。
浩などは、もはや、その場に存在してはならない人物のようにすら思えた。
世の中には勉強しないで生きていける人間が、ツータイプいるのだ。
裕子や浩のように最初からあきらめている、要するに勉強しても無駄なタイプと、直美のように、勉強の不要なタイプ。
無駄と不要——似ているようで、実はまるで正反対……。
類義語辞典には、どう書いてあるのだろう。
裕子は思った。
……もし同じ意味だと説明してあったら、わたしはその辞典の出版社の本は、一生、買わない……
そして浩は、天才相手には話す言葉も考えつかず、ただ黙ってついていくことにした。
それに、みっともないからいわないけれど、二日酔いは裕子以上で、一言口をきくのも、頭が割れそうだったのだ。

＊

三人は松濤町の屋敷町を抜けて、隣町の神山町に来た。
ニュージーランド大使館の前の道を、環状六号線に向かって歩いて行く。
このあたりは、ほかにもいくつか大使館があるせいか、めったに断水や停電のない地区として、ごく一部の人に知られてた。
大使館と同じ水道管や電線を使っているために、水道局も電力会社も簡単に止めるわけにいかないらしいのだ。
環状六号線に辿りつく一本手前の横道……そのつきあたりに、ＮＴＴの大きな建物が見える。これが富ヶ谷町、通称リッチバレーにある代々木の電話局だ。
代々木というよりも、渋谷駅を中心に松濤をふくめた渋谷の中央部の電話回線をほとんど取りしきっている電話局だ。
二人は、電話局の方向に横道を折れた。
歩きながら直美は、小西修に関する簡単な予備知識を吹き込んでくれた。
修は、二年になってからほとんど学校を病欠している。
「どうもそれ、ほんとうの病気じゃないの。毎朝、代々木の森林公園でジョギングしているのを見たって噂もあるの」
「パターンどおりの登校拒否？……」

「まあね。ただしベーシックな暗いパターンじゃないわ。だいいち、わたしたちの学校、登校拒否されるようなまともな学校？」

たしかに、近ごろの学校としてはまともじゃない。

「いじめもない。競争もない。やる気もない。ましな教師も、悪徳教師も、変態教師もいやしない。困ったもんだと言葉もない……」

裕子は肩をすくめた。

「小西さんは、学校に来る暇がないんだと思うのよ。来たって無駄だもの。今の松濤高校のレベルなら、たぶん、中学生以前にマスターしていたと思うの」

直美は、要するに偏差値の差を、ごくあたりまえのことのように言う。

こう平然と言われると、呆然が過ぎて……イヤなヤツーゥ……の言葉も詰まってしまう。

「……あ、そ……」

そんなつぶやきしか出てこない。けれど、声が出たついでに聞いてみた。

「で、あなたは？　どうなの？」

「私は駄目」

……そかそか……うんうん、ホッとした……でも、続く台詞にまた唖然……

「だって、わたしが、どこの大学でも大丈夫だと自信を持てたのは高一のときなの……小西さんには敗けるわ」

「あ……そういうこと……」

「ええ……わたし、現実を認めるわ」

……ああ……、それを認めねばならぬのなら、受験の神さまよ……、神の前に人は平等ですか？……はい、人間は生まれながらにして、自由かつ平等です……。よく言うよ……、そんな解答、答案用紙とともに、焼却炉の中で燃えちまえ……

けれど、そんな裕子の気持ちなど気にも止めない様子で、直美が言った。

「桃太郎って知っている？」

「あん？」

……なんで、ここで桃太郎なんじゃ？……きびだんごを貰ったって偏差値は上がらないと思うけれど……、それとも……

「学校サボって、鬼退治にでも行ってるわけ？　日本再発見、怨霊と鬼の世界」

直美はクスッと笑って、

「なぜか好きです。そういう世界……。でも、今回の桃太郎、パソコンのワープロソフトのことなの。一太郎の次の世代を担うソフトだって、最近、騒がれているでしょう？」

「パス！」

裕子は即座に答える。

裕子は、この手の話ときたら、桃太郎の昔話並みにレトロだ。なんてったって、書道三級なのだ。ワープロは敵なのだ。

……だいたい、コンピューターなんてしろものは、計算できなくてもスケートボードの代わ

りにはなったそろばんを日本から追い払い、今また、伝統芸術、毛筆の腰を折ろうとしている……。そういえば最近、日ペンの美子ちゃんの宣伝を見かけなくなったけれども、お元気ですか？　美子ちゃん、ワープロなんかに敗けるな！　ぐあんばれ！……

もっとも、裕子が書道を習ったのは、店のバーゲンの貼り紙を少しは人並みに書いてもらいたいと、両親から強制されたものだけに、偉そうなことは言えないのだが……。高い授業料（やりたくないものは、どんな値段だって高い！）を払って苦労しただけに、なおさら、猫も杓子も……、いや猫でも打てて書けそうなワープロが普及するのは、わけもなく面白くなかった。

それでも、「極まりアンティーク」とは呼ばれたくないから、ワープロ嫌いのわけを聞かれたら、いつも、こう答えることにしていた。

「メーカーが違うと互換性がないでしょう……。昔、ビデオテープにビデオディスク……今はワープロ。互換性がなくてありがたいのは、恋人だけわ」

「その互換性を達成したのが桃太郎なの。どんなパソコンやワープロで使っても、実行キーのワンタッチで使用可能だわ」

なんだか、いきなり直美の説明は、パソコンの分かりにくいカタログ口調になった。

「どんなやつにも合っちゃうのって、わたしの好きなタイプじゃないな」

裕子はそう言いながらも肩を落とした。

……ああ、時代がわたしを追いつめる……、でも思い直すことにしよう……。なぜって、も

しも独立国ができたなら、書道を高校の必修授業にしてやるわい……。ざまあみろ……
などと、一人でほくそえんでしまう裕子は、どこかしらまだ、独立の話を真剣には感じきれていないのかもしれなかった。
「その桃太郎だけど、著作権は個人名になっているの」
直美がつぶやいた。
「あん？」
「プロジェクトチームではなく、個人の力で開発したってこと……。ファミコンのソフトなら聞いたことがあるけど、桃太郎のようなソフトは個人なんかじゃ、とても無理だと思ってた……、でも、やってのけた人がいたのよ」
直美は、名探偵が推理を発表するような調子で……、
「その人の名は小西幾太郎……小西さんのお父さんなの」
「はあ……、サイエンティストなんだ。小西さんの家」
「それが違うの。国家公務員。それも、大蔵省の参事官。変よね？」
「なにが？……」
「大蔵省ですもの……、お金の計算はお上手でしょうけど……。ものは、ワープロのソフトよ……、しかも、参事官なんて、最高に忙しい役職でしょう？」
裕子は、省庁のことなど知らない。しかし、うちの大蔵省、ママだってけっこう家計のやりくりに七転八倒している。ましてほんまもんの、大蔵省だ。少なくとも七転び八起きぐらいは

しているだろう。
「ワープロソフトの開発なんて、とてもやれる時間はないはずよ。それでも、できてしまった。誰がやったのか？……」
　直美の言いたいことは推理できた。
「小西ジュニアね？……」
「そういうこと……。わたし、さっき電話したときずばり聞いたわ。桃太郎はあなたでしょう？……って。そうしたら、小西さん、……次のソフト、金太郎ももうできている……、ですって。高一の春に作ったらしいわ。桃太郎が普及しつくすまで、メーカーが出し惜しみしているんですって」
「高一で金太郎？……じゃあ、その前の桃太郎ちゃんを作ったのは？……」
「中三の夏休みですって……」
　さすがの直美もこれには溜め息をつかずにはいられないようだ。
「中三かあ……、そんなに急いでどこへ行く……」
　裕子がつぶやいた。
「独立の話にのせたいから、正直に話したわ」直美が言った。「そして、あなたなら独立できますか……って。若干の挑発よね。小西さん、しばらく黙ってた。テレカじゃない公衆電話から掛けていたから、少し焦ったけど、十円玉が切れる前に言ってくれた。私たちに会いたいって……、受話器を戻したら、十円玉が全部、戻ってきたわ」

小西修が、電話回線になにかをしたのだ。

三人は目の前のNTTを見上げた。

……ま、儲かっているからいいでしょう？……それに、毎夜の長電話、わたしたちは、おとくいさんのはずです。すこしは、サービスしてもらってもいいんじゃない？……

だが、NTTともっともっとお友達になり、大盤振る舞いのスペシャルサービスをしてもらえるとは、そのとき、裕子はまだ考えていなかった。

小西修の家は、NTTの傍にひっそりと立っていた。

近くの豪邸や億ションに比べたら質素な建物だ。

ただ、衛星放送の受信にしては、馬鹿に大きなアンテナが、ベランダに置いてあった。

玄関の扉が開き、出てきた修に、裕子はいささか驚いた。

ごく普通の高校生に見えたからだ。

もちろん、マッドサイエンティストのユニホームともいえる、よれよれの白衣など着ていなかったし、ひびのはいった度の強い眼鏡もつけていなかった。

顔色は青白くなくむしろ浅黒く、髪はぼさぼさでなくよく櫛がはいり、フケのかけらも飛んでこなかった。

無精髭などさらになく、エロイカのシェーブローションの香りがした。

天才高校生、パソコン、ワープロ、TVゲーム、そして部屋に閉じこもりっぱなしということからくる、なんとなくジメジメしたひ弱なイメージからは遠く離れた、健康そうな男の子だ。

ま、ちょっと変わっているとしたら、昼間からパジャマを着ていたことと、そのパジャマで隠せないほど、腕が太く、胸が厚かった。

背丈こそ高くはないが、そうとうにシュワルツェネッガーしている身体つきだ。それでも、

「女の子とまともに話すのは、三カ月ぶりかな？……」

かなり無気味そうなことを言いながら、修は三人を自分の部屋に通した。

そこで、三人はさらにぽかんと口を開けなければならない。

「これがコンピューターする人の部屋？」

裕子にささやかれた直美は、言葉もなかった。

十二畳ほどのチークのフローリングに、アスレチッククラブにあるような本格的なトレーニングマシーンがドンと置かれ、天井からはサンドバッグが吊り下がっている。

ルームランナーもある。今やどこの家でも、物干しやえもん掛け代わりにしか使われていないぶらさがり健康器まであった。

壁のマントルピースには、酒瓶の代わりに、医薬外健康食品の缶や瓶がきっしりと詰め込まれている。

コンピュータールームと呼ぶよりも、ほとんど、スポーツクラブのジムだった。

コンピューターらしいものをこの部屋から探すとしたら、他にはなにも置いていない白木のテーブルの上に、ひとつだけある三十七インチほどのモニターテレビだ。もっとも、このテレビは、やけに奥行きがなくて、映画のワイド画面のように横幅が長かった。

けれど、NHKの放送センターが近い裕子たちにとっては、それほど珍しいディスプレイではない。

「ハイビジョンね……」コンピューター関係らしいものを見つけて、ほっとしたのか、直美がやっと口を開いた。「この部屋で、桃太郎を作ったの？」

「まあね……」

修がうなずいた。

「コンピューターもキーボードもなしで？……」

「キーボードはここさ」

修は、白木のテーブルの引き出しから週刊誌大の薄いキーボードを出した。

あまり見たことのないキーボードだった。JIS方式や親指シフトと違い、キーが扇状に並んでいる。

「キーボードは自分が使いやすいものを使えばいい。これ、キーが必要ぎりぎりの三十しかないからね。僕には使いやすい」

修は、壁に備えつけたタンスの扉を開けた。

オーディオのアンプのようなものと、ビデオデッキのようなものが三台、置かれていて、その上の棚には、CDのケースのようなものがずらりと並んでいた。

……のようなもの……、という表現がやたら多くなってしまったが、裕子にとっては未知のメカだ。……のようなもの、としか言いようがない。

それはスイッチボタンもほとんどなく、十万円以下の手軽なシステム・ステレオと比べても、あっさりとして小さかった。
修は、CDのようなものを摘んで、
「オプティカルディスクとデッキさ」
「それだけなんですか？」
直美は、装置の簡単さが腑に落ちない。
「メインはどこなんです？」
「メイン？」
「メインのコンピューターです」
「企業秘密……」
修はいたずらっぽく微笑した。
「僕のメインは第四世代なんだ。こんな部屋には入りきれないし、第一、数百億もする第四世代をひとり占めするのはもったいないよ」
「第四世代を使っているんですか？」
直美は好奇心で身を乗りだした。
第四世代……、真空管を第一世代として、第二はトランジスター、第三がIC、そして現代の最先端を行くのが、超LSIの第四世代コンピューターだ。
主に宇宙開発や原子力関係に使われているというが、用途の広いコンピューターだ。なにに

使われているか、本当のところは、知る人ぞ知るなのだ。

修は直美にうなずいた。

「うん、アクセスできれば、どんな使い方の第四世代でも利用させてもらうよ」

「そうか、小西さんは、ハッカーしていたんですね？」

直美がずばりと聞いた。

「さあね……」修の顔からは、微笑が消えない。「見つかるまでは、やってないってこと……、それに僕は、ほかの馬鹿のように、銀行の金を操作したり、相手のプログラムにいたずらしたりはしない。ただ、相手がお暇の折に、ちょっと使わせてもらっているだけさ」

裕子も浩も、ハッカーの名前はよく聞いたことがある。

ハッカーとは、電話回線などでコンピューターの記憶回路にアクセスして、情報を覗き見したり、別のプログラムを紛れ込ませて情報を混乱させる人のことらしい。ハッカーに悪意があれば、大なり小なりパニックが起こる。

コンピューターでがちがちに固められた今の世の中だ。

軍隊の指令系統のコンピューターを誤動作させれば、戦争だってコントロールできるのだ。

事実、昔の映画で、ある青年がゲームのつもりでコンピューターのスイッチを入れてしまい、核戦争が起こりかけるというSFがあり、その映画が公開されたとたん、影響を受けたハッカーの犯罪が増大し、今もその数は減りはしない。

……えらい時代になってしもた……

裕子はなんとなく、とり残された気分で、直美と修の間にぽんぽん交わされる横文字の単語をぼんやり聞いていた。

ビット……、バイト……、メガバイト……、アドレス……、アクセス……、ノイマン……、バイオ……。

裕子は、浩を見た。

……分る?……

分かるはずがない……。だいいち、二日酔いで横文字と日本語の判別もつかない状態の浩だ。

ニューロ……、シグマ……、トロン……、エーアイ……、アプリケーション……、そして、独立……。

……あん?……なに? いまの……

どれほど経っただろう。いきなり耳に飛びこんできた日本語に、裕子は、びくんと背筋を伸ばした。

「独立できるかもしれないね、松濤は……」

修だった。

「わたしもそう思うんです」

直美はファイロファックスのメモを修に見せた。

「一応、わたしが考えたラフなシノプシスですけれど……」

「僕もね、君から電話があってから少し考えたんだ……」

修は、キーボードのキーを押した。
ハイビジョンのディスプレイに、どっと英字が映し出された。
「まだ見せる気はなかったから、英語のままだけど、翻訳機にかけるかい？」
「このままで結構です」
直美はディスプレイを読み始めた。
後ろから覗き込んだ裕子が、表題の「ショートトー・プロジェクト・オブ・インディペンダンス」を読みとったとき、直美はもう全文を読み終わっていた。
「こんなことって……」
呆然とつぶやいて、修を振りかえった。
修も溜め息をついてから、メモを読んでいた目を直美に向けた。
「驚いたな。僕がハッカーされた気分だ」
「ええ……、わたしも頭の中を覗かれた感じ」
二人の考えたプランは、同じコンセプトだったのだ。
「君のＩＱは……、少なくとも第四世代のメガバイト数に敗けていないようだね」
直美の顔に、ふっと影が差した。
「ビットとＩＱは比べられないわ。ビット数は、コンピューターの全てを決めるけれど、ＩＱの数は、人間を決めはしないもの。そうでしょう？」
「そりゃそうさ。人間は数字じゃあ分からない。だからＩＱもビットも人の気持ちまでは動か

せない」

「ＩＱの話はもうよしましょう……」

直美の表情はなぜか暗かった。だが、すぐに明るく、

「ＩＱはノー・サンキューなんちゃって……」

下手なジョークを言ってから、話を元に戻した。

「小西さんとわたしのプランは、今のところコンピューターの国盗りゲームに毛がはえたようなものよね」

「うん、今回、動かなきゃならないのは、計算されたゲームのキャラクターじゃなく、生の人間だからね」

「それをどう動かすかは……」

「うん」

二人はおもむろに裕子を見た。

「えっ？」

思わず裕子は自分の後ろを見た。

裕子のほかには、浩だけ……。情けないが、今の時点では浩が対象物になるはずがない。

……するっていうと……

「わたし？」

裕子は、自分の鼻先を人差し指で差した。

二人はおもむろにうなずいた。

「なにしろ、うちのあの野球部を甲子園まで行かせかけたんですからね。リーダーには持ってこいだわ」

直美が、そう答える。

裕子はいささか慌てた。いままでは、二人の長話を呆気にとられて聞いていただけだったのが、いつの間にか話の中心に自分がいるのだ。

「でも、プランを立てたのはあなたたちでしょ？」

「コンピューターじゃ、人は動かせない……僕は君たちのブレインでいく」

「わたしもその線よね」

直美と修は互いにうなずいた。

「でも、私たちだけじゃ決められないわ……」

直美は微笑して裕子に言った。

「みんなに聞いても結果は同じ……」

「うん、計算によるとそうなる」

修はそう言ってから時計を見た。

「そろそろ時間だ。コンピューターと付き合うには体力が必要でね」

修はトレーニングマシーンに乗って腹筋運動を始めた。

「そろそろ時間って……、毎日やっているの？」

裕子が聞いた。

「一日五時間のトレーニングメニュー……。健全なる肉体には健全なるコンピューター操作が宿るってやつさ」

……一日五時間！　やっぱり、まともじゃないわ……

で、裕子は聞いてみた。

「それじゃあ、学校はおろか、ガールフレンドゥする暇もないわけよね」

「昔は、女の子は計算どおりいかないから面白かった。でも、今は、パターンの女が多すぎるよ。パターンどおりなら、コンピューターのほうがよっぽど複雑で楽しめるさ」

……そうとう、ほとんど、まともじゃないわ……

考えてみれば、ほとんど会ったことのない修が、いきなり独立話に乗ってくるのもまともじゃないと言えないこともなかった。

だがともかく、独立へのプログラミングはGOしたのだ。

修はふっと微笑して、裕子と直美の出て行ったドアを見た。

「あん?……」

二日酔いの浩が、ぼうっと立っていた。

「あんた、まだいたの?」

「え?……あ、……ああ」

浩は、あわてて出ていった。

……頭、痛え……

だが頭の痛さは、二日酔いよりも、甲子園よりも、これからが本番になりそうだった。

＊

次の日の野球部室で、修の計算どおり、裕子は松濤独立プロジェクトのリーダーに選ばれた。

選ばれて断るぐらいなら、最初から生徒会会長などやっている裕子ではない。

やるっきゃなかった。

サブ・リーダーは、なぜかまた浩だった。

「副会長ならやってくれるわよね……」

裕子にこう言われたら、やるっきゃなかった。

いつもどおりのなりゆきだった。

しかし、裕子を選びはしたものの、みんなは冗談とも本気ともつかぬ気分だった。

「独立？」

「都立松濤高校独立国？」

なにやらわけの分からぬ気分もしたが……。

甲子園辞退のうっぷんをぶつけるのに適当なゲームには思えた。

この日、「松濤独立執行委員会」は、発足したことになっている。

今でこそ、メンバーのほとんどが、発足当時から独立を目指したと発言しているが、どうも

信じがたい一面もある。

なぜなら、彼らの行動には、ほかの国の独立に見られる生真面目さがあまりになさすぎる気がしてならない。

後で思えば、彼らは、独立ゲームに浮かれていたとしか思えない節がある。

ようするに、祭りの準備だったのだ。

遊びから始まったのだ。

しかし、それは遊びの一歩に見えても、松濤と渋谷と日本にとって、奇跡的な一歩にほかならなかった。

今、本当の奇跡が、始まろうとしていた。

つづく（上巻　了）

※この小説はフィクションであり、実在の個人、団体とは一切関係ありません。

アニメージュ文庫

都立高校独立国【上】

首藤剛志

'49年8月18日、福岡生まれ。脚本家・小説家。19歳でシナリオ・デビュー。以後さまざまな作品を手がける。小説家としては「ゴーショーグン」シリーズ、「永遠のフィレーナ」シリーズが代表作。

古山　匠

'57年7月18日、静岡生まれ。高校卒業後、日本アニメーションに入社。初仕事は「くまの子ジャッキー」の動画。以後「ミーム」「愛の若草物語」の作監を経て、現在はフリー。

1989年1月31日初刷
Printed in Japan

N-045

著者　首藤剛志
発行者　尾形英夫
〒105-55　東京都港区新橋4―10―1
発行所　株式会社　徳間書店
電話　03(433)6231(大代)
振替　東京4―44392番
印刷
製本　大日本印刷株式会社

〈編集担当　吉田勝彦〉

★この本を読んでの感想を上記までおよせ下さい。また著者へのお便りもお待ちしています。

ISBN4-19-669604-X

首藤剛志作品リスト

戦国魔神ゴーショーグン
その後の戦国魔神ゴーショーグン
狂気の檻
覚醒する密林
時の異邦人
はるか海原の源へ
幕末豪将軍
永遠のフィレーナ①②③
いつかきっとピーチブック
それからのモモ
夢の中の輪舞

カバーイラスト＝古山匠
カバーデザイン＝真野薫
カバー印刷＝真生印刷㈱